別記様式第２号

平成２８年度
宮城県
NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした
復興・被災者支援事業
評価報告書

都道府県担当部局	（窓口） 環境生活部共同参画社会推進課ＮＰＯ・協働社会推進班 担 当 者 氏 名　工藤　あかり 電　話　番　号　０２２－２１１－２５７６ メールアドレス　kyoshan@pref.miyagi.jp

１．事業の成果目標の達成状況

番号	成果目標		達成状況	
	項目	目標（値）	達成状況	達成状況に関する説明等
１	ＮＰＯ等の絆力を活かした復興･被災者支援の取組における受益者に対し実施するアンケートの「改善した」「どちらかといえば改善した」の平均改善率	５０％	８０．８％	目標を達成し，ＮＰＯ等による取組が受益者にとって効果的であったといえる。
２	ＮＰＯ等の絆力を活かした復興･被災者支援の取組支援事業及び復興･被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化により支援を行うＮＰＯ等の数	延べ 40 団体（県内 800 団体の約 5%）	８３団体（ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援：４４団体／復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化により支援：３９団体）	目標を達成し，絆力を活かした復興・被災者支援及び復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力の強化により，きめ細かな復興・被災者支援の継続的な実施に資したといえる。

（備考）

成果目標は事業実施計画において定めた内容と整合を取ってください。

２．事業実施結果

２－１．総括表

交付対象事業		県が実施した事業内容 （名称と実施主体）	事業費 （円）	国費 （円）	県費等 （円）	「1.事業の成果目標」との対応 （番号）
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援	①被災者の心のケア、健康・生活支援に向けた取組	（名称）移動とくらしのセーフティネットを地域と共に守り育むプロジェクト （実施主体）特定非営利活動法人移動支援Rera	11,053,944	7,369,296	1,630,704 (2,053,944)	1・2
		（名称）生きにくさを抱える人達が地域で生きる種を作る （実施主体）特定非営利活動法人奏海の杜	5,304,160	3,536,106	1,228,894 (539,160)	1・2
		（名称）NPO・小中高校・行政と連携した南三陸町の復興人材育成事業 （実施主体）特定非営利活動法人キッズドア	6,544,517	4,363,011	1,526,989 (654,517)	1・2
		（名称）石巻「はたらくサポーター」養成プロジェクト （実施主体）特定非営利活動法人Ｓｗｉｔｃｈ	2,595,816	1,730,544	599,456 (265,816)	1・2
		（名称）南三陸町志津川高校内での学習支援居場所作り事業 （実施主体）特定非営利活動法人底上げ	2,721,870	1,814,580	434,420 (472,870)	1・2
	①被災者の心のケア、健康・生活支援に向けた取組及び②コミュニティ形成等の復興に向けた取組	（名称）絆を繋ぐ・地域コミュニティでの心の居場所創造事業 （実施主体）特定非営利活動法人とめタウンネット	6,322,822	4,215,214	1,474,786 (632,822)	1・2
		（名称）人材育成と「みやぎ傾聴ネットワーク」交流研修会 （実施主体）特定非営利活動法人仙台傾聴の会	3,070,180	2,046,786	688,214 (335,180)	1・2
		（名称）「あそびば」「まなびば」の講座運営事業を通じた、南三陸町の被災者と地域住民が自立、交流するためのサポート、見守り事業 （実施主体）特定非営利活動法人びば！！南三陸	4,620,677	3,080,451	688,549 (851,677)	1・2
		（名称）南三陸地域支援 （実施主体）宮城県臨床心理士会	734,983	489,988	171,012 (73,983)	1・2
	②コミュニティ形成等の復興に向けた取組	（名称）農業と食を生かした若林区復興プロジェクト （実施主体）一般社団法人ReRoots	1,944,986	1,296,657	427,343 (220,986)	1・2
		（名称）被災コミュニティの維持・形成と共助的見守り啓蒙・推進事業 （実施主体）一般社団法人石巻じちれん	6,476,701	4,317,800	1,308,200 (850,701)	1・2
		（名称）コミュニティ2.0 ～次の5年に向けた創造的協働の創出 （実施主体）一般社団法人ISHINOMAKI2.0	6,471,115	4,314,076	1,509,924 (647,115)	1・2
		（名称）山元町における地域コミュニティ・支え合い活動推進事業 （実施主体）特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター	6,561,387	4,374,258	1,530,742 (656,387)	1・2

	④中間支援の取組	（名称）被災地・地域活動団体ガイドブック作成事業 （実施主体）特定非営利活動法人地星社	3,016,229	2,010,819	703,181 (302,229)	1・2
	小計（a）		67,439,387	44,959,586	13,922,414 (8,557,387)	

	交付対象事業 県が実施した事業内容 （名称と実施主体（委託先））	事業費 （円）	国費 （円）	県費 （円）	「1.事業の成果目標」との対応 （番号）
（2）復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化	（名称）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興支援事業業務 （実施主体（委託先））一般社団法人みやぎ連携復興センター	3,814,311	2,542,874	1,271,437	2
	（名称）東日本大震災におけるＮＰＯ等の活動実態調査事業業務 （実施主体（委託先））公益財団法人地域創造基金さなぶり	2,370,600	1,580,400	790,200	2
	（名称）宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業受益者アンケート業務 （実施主体（委託先））特定非営利活動法人せんだい・みやぎＮＰＯセンター	199,800	133,200	66,600	1
	審査委員会運営,事業実績確認等	189,120	126,080	63,040	
	小計（b）	6,573,831	4,382,554	2,191,277	

合計（a＋b）	74,013,218	49,342,140	16,113,691 (8,557,387)	

（備考）

１　「県が実施した事業内容」は、実施した事業について全て記載してください。

２　（１）ＮＰＯ等による絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援に係る「県費等」については、県費と実施主体負担額の合計金額を記載するとともに、実施主体負担額を括弧書きで記載してください。

２－２．各事業の成果

（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（1）－１
事業名	移動とくらしのセーフティネットを地域と共に守り育むプロジェクト
事業実施主体と役割分担	特定非営利活動法人　移動支援 Rera
支援対象者の概要	◆宮城県石巻地域に住む、自力での移動が困難な状況の住民 （障害・高齢・疾病等の心身の状況、独居や老老介護等の社会的孤立、被災による転居やもともとの交通空白地などの交通の問題などによる外出困難者）
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日から平成 29 年 3 月 31 日まで
事業内容とスケジュール	■移動困難な住民のための送迎支援／頻回通院の必要な住民の送迎支援 ・自力での外出手段を持たない移動困難な住民のための送迎を行った。 ・車いすやストレッチャー等に対応した福祉車両や一般乗用車を使用。スタッフは福祉車両運転協力者講習等を受講し技術の向上に努めた。 ・公共交通の利用を前提とし、利用者の個別の状況に応じた交通利用案内を行った。 ・通院回数が多く経済的負担も大きい人工透析や抗がん治療等の頻回通院送迎は、専門チームとして行う計画を立てたが、他の乗り合いニーズにも対応したため、分離せず総合的な送迎支援とした。 ≪実施期間≫　通年（日曜・元日除く） ■個人や企業を含む地域全体で生活困難者を支える『レラメイト』 ・セーフティネットとしての送迎や、暮らしを豊かにするための生活支援などの活動を、利用者や地域の理解者が一緒に支えていく「おたがいさま」の仕組みを作る。 ≪実施期間≫　準備：7 月～　　広報：11 月～　　開始：12 月～ ■暮らしを豊かに楽しくさせるためのおでかけ支援 ・移動の支援だけではカバーすることのできない、生活をより豊かにするための「おでかけ」ニーズに応えた、介助や付き添いつきの外出支援 ≪実施期間≫　準備：7 月～　開始：9 月～ ■さまざまな専門機関との連携による「穴の開かない」要援護者見守り体制 ・外出以外の生活の問題に対応するため、多くの関係機関との連携体制を構築し、維持していく関係づくりとしての情報交換会を行った。 ≪実施期間≫　会議参加：9 月、10 月、1 月、2 月 ■担い手としてのレベルアップと安定した組織作りにむけた取り組み ・スタッフのためのスキルアップ・レベルアップ・組織作りのための研修を行った。統括アドバイザーを 1 名お願いし、事業の進捗確認、組織作り、勉強会開催などの助言を受けた。 ≪実施期間≫　研修：7 月～3 月　毎月 1 回開催、打ち合わせ 1 回ずつ ■移動支援のノウハウを他地域で生かすための情報整理 ・当団体の培ってきた災害移動支援活動を記録に残し、次の災害に備え、他地域での災害や他の交通地域の移動支援に役立てるための冊子づくりの準備を行った。 ・記録者に取材してもらう形で冊子にまとめる計画で準備をしていたが、あらためて有益な参考資料を作るには、専門チームを作り団体の活動当事者が執筆に参加する形で取り

組みたいということで意見が合致し、2017 年度の完成を目指し引き続き取組を進めることにした。そのため継続取り組み案件とする。
≪実施期間≫　打合せ：11 月、12 月、1 月、2 月

事業費とその内訳

・事業費総額：11,053,944 円
・うち補助金額：9,000,000 円（国費 7,369,296　県費 1,630,704）自己負担 2,053,944
・内訳：

人件費①	6,680,000 円
人件費②※自己負担	1,900,000 円
諸謝金	540,540 円
旅費	149,984 円
消耗品費	489,941 円
印刷製本費	177,797 円
使用料及び会場賃料	1,082,634 円
募集広告費	33,048 円

具体の成果

【目的・課題・背景】
・2016 年度の石巻地域では、復興住宅の完成と転居が一気に増加した。特に当団体による送迎利用者は、暮らしにさまざまな課題、「生きづらさ」を抱える者が多く、住居移転も後の方になりがちであるため、震災から 5 年余りが経過したこの時期にようやく引っ越しをする者も多かった。一方で完成までにまだ数年かかるという復興住宅もあり、また転居後の孤立や病気の悪化等の新たな問題も出てくるなど、被災住民の置かれる環境が多様になってきた。
・新しい住宅での外出機会の減少や体調悪化、復興住宅の交通の不便さなどから、移動の支援への新たな必要性が増す一方で、外出の機会そのものの減少や孤立など、移動の枠を越える支援や見守りなどの必要性も見えてきた一年となった。
・2016 年度の当団体の目的は、状況の変化を見据えながら安定的な送迎を行い外出困難な住民を一人でも減らすということ、送迎だけでなく外出困難者に発生する生きづらさを軽減するということ、お出かけの機会を増やすということとした。

【事業成果】
◆直接的効果◆
・障害や高齢、病気、生活困窮などさまざまな困難を抱えながら生活している住民が、当団体による送迎の支援を受けることによって、自立した暮らしを維持するために必要な外出手段を得ることができた。送迎のべ人数は 6 月 16 日～3 月末で 15,336 名、実人数は 400 名前後となっている。利用者の多くが、当団体の送迎がないと外出を諦めるか、あるいは生活費を切り詰めて最低限のタクシー代を捻出している。

28年　　29年

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
送迎人数	839	1,738	1,606	1,797	1,820	1,735	1,432	1,318	1,406	1,665	15,356
送迎回数	734	1,467	1,361	1,502	1,512	1,411	1,160	1,071	1,176	1,385	12,779

※16日以降

・活動を持続するための助け合い『レラメイト』導入によって、助成金や補助金以外の新たな持続の仕組みが生まれた。12 月から 3 月の受付で、すでに 290 名を超える申し込みがあり、利用者には定着している。
・送迎が休みの日曜日を利用した、付き添い・介助つきお出かけイベント開催による「お

	でかけ」支援で、利用者はこれまで一人で行けずあきらめていた買い物、お墓参りや掃除、温泉などを楽しむことができ、生活に充実感を持たせることができた。 ・定年退職後の地域住民がスタッフとして新たに送迎支援に参加した。利用者と年代も近く同じ目線で悩みや喜びを共有できるほか、スタッフ自身の生き甲斐にもなっている。 ・福祉や地域づくりなどに携わる団体の交流の場を作り情報交換を行ったことにより、支援者同士が互いの活動を理解し協働する体制の基礎づくりとなった。情報交換会の参加者も多く、移動支援への関心の高さを実感する事ができた。 ・毎月一度行う研修会により、スタッフの事業遂行にあたっての理解の深まりや意識向上、積極性の向上、検討や振り返りなど、円滑な実行や最適な事業内容決定に非常に大きな効果があり、事業のみならず組織全体の基盤を強化する効果があった。 ・災害移動支援のノウハウ集約について、残念ながら完成まで年度内に漕ぎ着けることができなかったが、作成作業の過程において多くの課題整理やネットワーク強化、ノウハウ集約の必要性の共有などが進み今後につながった。 ◆波及的効果◆ ・安定した送迎を供給することにより、住民が「自分にはいつでもここで外出する術がある」と思うことができ、心身を活発に保つことに貢献した。 ・送迎対象者は病気や障害、加齢などで心身の不調があったり経済的に苦しかったりする者が多いが、それでも外出や通院をあきらめずに暮らすことにより、健康寿命の延伸や介護度の悪化防止にもつながっている。 ・孤独感を抱える利用者が他の人と乗り合いで送迎を利用し、車中の会話で元気づけられたり勇気づけられたりする場面や、送迎で知り合いになった者同士で行き来するようになるなど、孤立感が解消され生きる意欲の向上に結びついている。 ・地域住民がボランティアとして参加し、移動の必要性や助け合いの大切さを認識して、「お互いさま」の意識が高まり結束が強まり、復興まちづくりを推進する力になる。 ・支援者同士の情報共有の場を通して互いを知り連携が強まり、それぞれの組織が補い合うことで「できること」が増える。協働することで暮らしやすいまちづくりを支える基盤づくりとなる。 ・スタッフ全員参加による研修の効果が他の支援組織にも参考事例として注目され、他の団体がそれぞれの基盤強化の取り組みを行いはじめたり、検討を始めたりしている。
29 年度以降の活動計画	6 年間積み重ねた地道な活動が、他団体のみならず自治体や中間支援組織等にも注目され認められる機会が増えた。この信頼とネットワークを大切にして、さまざまな形での協働を考える。 災害時および平時のための移動支援のノウハウの集約、文書化をさせる。 送迎講習会で地域の移動の担い手を増やすほか、それぞれの利用者のための送迎ができる団体を増やすための研修受け入れを行う。 引き続き安定した組織づくりと移動困難者のための仕組み作りに取り組む。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☑Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった

	（上記評価の理由） 　着実に移動困難者のための送迎を積み重ねると共に、活動を持続するための『レラメイト』導入によって、助成金や補助金以外の新たな持続の仕組みづくりに取りくんだ点を評価する。

整理番号	（１）－２
事業名	生きにくさを抱える人達が地域で生きる種を作る
事業実施主体と役割分担	事業実施主体：特定非営利活動法人　奏海の杜 活動連携団体：社会福祉法人そうそうの杜（大阪市） 研修、企画、支援方法アドバイス ：特定非営利活動法人出発のなかまの会（大阪市） 研修、企画、支援方法アドバイス
支援対象者の概要	・南三陸町在住の在宅障害者や引きこもり不登校の方々 ・障害福祉サービス事業所に通っている方々の余暇
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日から平成 29 年 3 月 31 日
事業内容とスケジュール	【取組内容】 震災で従来のコミュニティが壊れてしまった南三陸町で、引きこもりなど生きにくさを抱える人達の社会復帰を以下の３つの方向から支援した。 ①　本人の意欲向上と地域の障害理解 ②　運動や対話による精神的な充足を図る ③　地域や職員の障害理解を深め、地域福祉の向上を図る 【スケジュール】 ①　本人の意欲向上と地域の障害理解 →個別相談や居場所作りを通して、生きにくさを抱える人達の社会復帰を支援する ・車や公共交通機関を使って遠出をする ：経験を積むことで地域へ出ることへのハードルを低くし意欲を向上させる 7/12　気仙沼市（シャークミュージアム）12 名 8/9　仙台市（仙台市科学館）30 名 1/5　東松島市（トリックアート展）14 名 ・踊り・工作・絵など文字や言葉以外の様々な表現方法を体験する ：表現する喜び楽しさを実感し、成功体験を重ね、自己肯定感を高める ②　運動や対話による精神的な充足を図る →個人の困り感やストレスをポジティブにアクティブに解消を図る ・ストレッチ体操教室（３回実施　参加者：各回 10 名程度） ・ニュースポーツ大会（１８回実施　参加者：各回 3 名～10 名程度） ・個別訪問、相談（３名と関わり、月１～２回程度訪問面談） ③　地域や職員の障害理解を深め、地域福祉の向上を図る →障害理解をキーワードに人が集まる場を作り、地域の意識レベルの向上を図る。発達障害支援ツールの活用などにより、職員の個別支援能力向上を図る ・ にこカフェ（コミュニティカフェ）の開催（６回実施　参加者 20 名程度） ・ 職員研修：臨床心理士研修（５回）、ヴァインランドⅡ研修（２回） ペアレントトレーニング研修（２回）発達障害理解研修（９回）
事業費とその内訳	事業費総額：5,304,160 円 うち補助金額：4,765,000 円（国費 3,536,106　県費 1,228,894）自己負担 539,160

	【内訳】人件費 4,752,370 円/消耗品費 551,790 円
具体の成果	【直接的効果】 ① 車や公共交通機関を使って遠出のイベントを開催することができた（3 回）。踊りや工作、絵など、文字や言葉以外の表現方法を実践する居場所を作ることができた。 ② 広い体育館を借りて運動の機会を提供することができた(18 回)。いつもの活動場所とは違う場所での活動であり、不安があるかと心配したが、ニュースポーツの緩やかな活動内容とカラフルな機材のおかげで、運動が嫌いな利用者も活動に参加することができた。 ③ 引きこもり不登校の方々の個別訪問をすることができた（のべ 16 回）商店街やスーパーなどもなく、外出先が案内できなかったため、外へ出るところまでいけなかったのは残念だが、一定時間話をすることで本人の気分転換にはなったと思う。また頻回で会い特に拒否されることもなかったため、ある程度信頼関係も深まったと推察する。 ④ 障害理解をキーワードにしたコミュニティカフェを開催することができた（6 回）場所を南三陸町と登米市の２ヶ所で行えたため、その地域の人へ向けての案内ができた。地域的に積極性は違ったが、登米市では回を追うごとに人が増え、ある程度の認知がすすんだと思う。 ⑤ 職員研修を行うことができた（ペアレントトレーニング 2 回、ヴァインランド研修 2 回、臨床心理士研修（5 回）発達障害理解研修（9 回）一人一人個別の支援方法が必要な方々であるため、障害特性の理解や発達年齢の評価は、継続的な支援を続ける中で費用に重要な事項となる。今回のそういった支援計画を立てるための研修は、チーム支援への第一歩であった。 以上、具体的な開催については事業内容の項目に記載。 【波及的効果】 ① 遠出のイベントを重ねることで、地域へ出ることへの不安や恐れが減少し、本人の意欲が向上した。来年度の企画を自らするようになった。 ② 言葉や文字以外の表現方法に興味を持ち、進んで参加するようになった子が多い。作品が増えたため、親御さんにこちらでの活動をより具体的に伝えることができるようになった。 ③ 運動によりストレス発散できることで、スムーズに毎日作業所へ通えているとの感想をいただいた。 ④ 巡回相談や送迎などの個別対応をすすめ、親御さんの理解が深まった。また様々な日中活動を提案することにより本人のやる気が育ち、外へ出る意欲が高まった。 ⑤ コミュニティカフェで地域の方々が障害者福祉に関わる時間が増え、意識が高まった。参加者は回を追うごとに増えた。 ⑥ 機会を見つけて積極的に研修を受講し、研修報告を書くことで本人内での定着を図り、さらにはミーティングで他の職員との情報共有をした。結果、支援の質と職員の意識が向上し、利用者の意欲に応えて利用頻度を上げることができた。

<table>
<tr><td rowspan="2">事業内容
29 年度以降の活動計画</td><td>① 活動理念を職員間で共有することから始め、個人の支援スキルや思いに頼らず、持続可能なチーム支援を意識した体制を作る。特に、将来の社会参加を意識して、意欲の向上とソーシャルスキルの向上を目指した療育を行えるよう支援コーディネーターを中心に支援体制の充実を図る。
② 引きこもりや在宅障害者の支援を続け、発達障害者が無理なく社会参加できるような特性への配慮が行き届いた場所作りを目指す
③ 広報ツールを見直し、広く活動を知っていただけるよう広報活動にも力を入れる。そして、法律に則った制度からこぼれ落ちている方々や、情報が行き届かずサービスに結びついていないような方々の生きにくさに寄り添った活動を続ける。
④ 研修会やコミュニティカフェ活動を通じて地域の発達障害理解を進め、支援者・被支援者の関係ではなく、地域の住民としてお互いが支え合える持続可能な支援の形を目指す</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価

（上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）</td><td>被災地の復興・被災者支援に関して，
☐Ａ：特に優れた成果が得られた
☑Ｂ：優れた成果が得られた
☐Ｃ：一定の成果が得られた
☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた
☐Ｅ：成果が得られなかった</td></tr>
<tr><td>（上記評価の理由）
生きにくさを抱える人達のみならず、地域の障害理解に取り組むことで、本人の意欲向上や社会復帰に向けての環境整備に繋がった点を評価する。</td></tr>
</table>

整理番号	（１）－３
事業名	NPO・小中高校・行政と連携した南三陸町の復興人材育成事業
事業実施主体と役割分担	特定非営利活動法人キッズドア 協働：認定 NPO 法人底上げ ・「底上げ」が実施している志津川高校学習支援の協働 ・弊団体のイベント企画の設定について相談
支援対象者の概要	震災から 5 年が経過し社会の風化は進んでいるが、南三陸町では未だ復興への道道のりは遠く、町の復興を担う若い世代の流出が続いている。復興を担う町内の子どもの流出を防ぐためには、充実した学びの場を提供し、町が一丸となって子どもの育成に力を入れて行く必要があると考える。短期的ではなく子どもに寄り添う継続した息の長い支援が必要である。
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日～平成 29 年 3 月 31 日
事業内容とスケジュール	【実施内容】 南三陸町の小学校から高校までの学校外教育を含む総合的な教育環境を、学校関係者、行政、NPO、その他町内外の様々なリソースと連携して充実させる。小学校から高校までの教育支援が充実し「南三陸町にいても充実した教育環境が得られる」という状況を作り、南三陸町内の復興人材を育成し、子育て不安、教育不安による町外への人口流出に歯止めとなることを目指す。 【スケジュール】 ＜志津川中学校での放課後学習会・夏期講習・冬期講習の実施、及び戸倉小学校の放課後こども教室への参加＞ ６月（20 日 68 人、21 日 58 人、28 日 50 人、30 日 40 人） ７月（5 日 43 人、8 日 36 人、11 日 33 人、14 日 35 人、19 日 28 人、25 日 32 人、26 日 34 人、27 日 6 人） 戸倉小学校夏休み学習会（21 日、22 日） ８月（1 日 40 人、2 日 40 人、3 日 32 人、5 日 27 人、22 日 23 人、23 日 18 人、24 日 25 人） 戸倉小学校夏休み学習会（1 日、2 日）、 ９月（6 日 42 人、13 日 52 人） 戸倉小学校にて放課後子ども教室（6 日、13 日） 10 月（6 日 30 人、7 日 30 人、12 日 15 人、14 日 10 人、28 日 44 人） 戸倉小学校学習会（14 日・28 日） 11 月（8 日 75 人、9 日 75 人、10 日 75 人、15 日 75 人、16 日 75 人、18 日 75 人） 12 月（2 日 40 人、6 日 54 人、7 日 50 人、15 日 54 人、20 日 52 人、21 日 50 人、27 日 75 人） 戸倉小学校学習会（6 日・7 日、20 日、21 日） 1 月（5 日 80 名、25 日 42 名） 戸倉小学校学習会（25 日）

	２月（3 日 45 名、8 日 53 名、10 日 15 名、14 日 52 名、15 日 60 名） 　戸倉小学校学習会（8 日、14 日、15 日） 3 月（1 日 50 名、7 日 55 名） ＜キャリア教育ワークショップの開催＞ ・11 月 芋煮会＆ワークショップの実施➡仙台と南三陸の中高生を集めて実施 33 名 ・3 月 気仙沼大島 1 泊 2 日ワークショップの実施➡仙台と南三陸の高校生を集めて実施 13 名 ＜戸倉小学校の放課後子ども教室支援員のための研修会を実施＞ ・11 月 お金のセミナー基礎編 10 名 ・2 月 お金のセミナー応用編 8 名 ・3 月 シアトル報告会 7 名 ＜歌津中学校を巻き込んだ写真コンテストを南三陸町の後援を受けて実施＞ ・町の後援は受けることができたが、歌津中学校は先生方の協力を得ることが出来ず、志津川中学校のみで実施した。 ・生徒たちが夏休み中、南三陸の魅力について撮影した写真をもとに 10 月に審査会を実施した。 ＜NPO 法人底上げと協働し志津川高校内での学習会やキャリア教育を実施＞ ・定期的に開かれている学習会をサポートしながら、来年度に向けた意見交換や計画を一緒に行った。 ＜南三陸町の小中高生と、仙台の中高生による合同サマーキャンプの実施＞ ・8 月に実施予定だったが、台風により中止。 ・代わりにキャリア教育と掛け合わせて 11 月に芋煮会を実施。 ＜中学 3 年生向け出張学習会の開催＞ ・志津川中学校の放課後学習会に参加している受験生向けに、10 月～2 月の毎週土曜日、全 18 回出張学習会を開催。（参加者数延べ 180 名） ・登録生徒数 15 名、会場は南三陸ポータルセンターを利用し 13:00～17:00 の 4 時間、受験に必要な 5 教科指導を行った。
事業費とその内訳	＜事業費の総額＞ 　6,544,517 円 〈うち補助金額〉5,890,000(国費 4,363,011　県費 1,526,989)〈自己負担〉654,517 ＜内訳＞ 　人件費 3,582,350 円 　諸謝金 177,466 円 　旅費 969,231 円 　消耗品費 638,002 円 　通信運搬費 504,653 円 　使用料及び会場借料 272,815 円 　委託費 400,000 円

具体の成果	＜事業目的・課題・背景＞ 　震災から6年が経過し社会の風化が進む中、南三陸町では未だ復興への道のりは遠く、町の復興を担う若い世代の流出が続いている。復興を担う町内の若い世代の流出を防ぐためには、充実した学びの場を提供し、町が一丸となって子どもの育成に力を入れて行く必要があり、子どもに寄り添う継続した息の長い支援が必要だと考える。この事業の目的は、南三陸町の小学校から高校までの学校外教育を含む総合的な教育環境を、学校関係者、行政、NPOと、その他町内外の様々なリソースと連携させ充実させることである。小学校から高校までの教育支援が充実し「南三陸町にいても充実した教育環境が得られる」という状況を作り、南三陸町内の復興人材を育成し、子育て不安、教育不安による町外への人口流出に歯止めとなることを目指す。 ＜成果＞ 　志津川中学校の学習支援においては、6月20日に開講式並びにオリエンテーションを行ったことで、３年生全員と先生、学習支援員が団結して受験に向けて頑張っていくという連帯感を作ることができた。また、「学習クラブ」という教材を導入したことで、生徒が自由にプリントを印刷し自主的に学習しやすい環境を作ることができ、早朝や放課後（学習会が無い日）も、意欲のある生徒は自ら学習するという積極的な態度が見られるようになった。実際の高校受験では、出張学習会に登録していた15人の生徒は全て第一志望の高校へ合格することができ、さらに3年生80人全員が3月中に進学先を決めることができた。 また、南三陸と仙台の中高生による合同のワークショップを行ったことで、様々な価値観を知り自分を見つめなおしたり、新しい仲間を作る機会を与えることができた。また、普段町外の同年代と接する機会が少なく人見知りで控えめな中高生に対して、積極性、主体性を育むことができた。 写真コンクールでは、普段は勉強やスポーツが苦手で目立たない生徒にも発表の場や賞賛される機会を与え自己肯定感や有用感を高めることができた。さらにプロのカメラマンや東京の企業の方から評論をもらえたことで新しい目標や夢をもたせることができた。 　最後に、この事業での一番の成果は、小中高を通した復興人材育成計画について町と打合せを重ねていくことで合意が取れ来年度に向けた協力体制を築けた点である。町や学校側から、保護者・生徒向けアンケートに実施協力いただけたことで、住民の教育に対する不安の原因や要望が明確になった。
29年度以降の活動計画	28年度に築いた協力体制をもとに、来年度は6割の志津川中学校生が進学する志津川高校において、教育を通した新たな取組を始める予定である。 今年度成功した仙台と南三陸を掛け合わせた交流は来年度さらにスケールアップさせ実施して行きたい。（予備校講師を招いた勉強合宿など） 町内の民間の有料教育サービスは依然として少なく、少子高齢化が激しく進む南三陸町へ新規出店するという企業は今後も増えることはないだろう。 志津川中学校においては、来年度もぜひ継続してほしいと先生からも保護者からも要望を受けており、さらに歌津中学校の父兄からも支援を受けたいとの声が上がっていると聞く。スクールバス通学が続く限り、放課後支援の必要性が求められる。 　今後は町内外へさらに協力体制を広げ、南三陸町において小中高を通した新しい

	教育モデルを構築し、全国へ向けて発信して行きたい。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 町や学校等との協力体制を構築し、生徒の学力向上のみならず、キャリア教育や他地域の生徒との交流等、幅広い学習機会の創出により、生徒の心のケアや積極性、主体性の醸成等に貢献した点を評価する。

<table>
<tr><td>整理番号</td><td>（１）－４</td></tr>
<tr><td>事業名</td><td>石巻「はたらくサポーター」養成プロジェクト</td></tr>
<tr><td>事業実施主体と役割分担</td><td>事業実施主体　特定非営利活動法人 Switch
<table>
<tr><th colspan="2">協働した他のNPO等</th></tr>
<tr><td>一般社団法人ISHINOMAKI2.0</td><td rowspan="6">後援の協力</td></tr>
<tr><td>石巻・川の上プロジェクト</td></tr>
<tr><td>一般社団法人イシノマキ・ファーム</td></tr>
<tr><td>(株)三陸河北新報社</td></tr>
<tr><td>(株)石巻日日新聞社</td></tr>
<tr><td>石巻商工会議所</td></tr>
<tr><td>一般社団法人石巻じちれん</td><td rowspan="3">よろず相談所　実施場所の提供・協力</td></tr>
<tr><td>IRORI石巻</td></tr>
<tr><td>高校生がつくるいしのまきカフェ「　」</td></tr>
<tr><td>石巻市復興まちづくり情報交流館中央館</td><td>講座の開催場所提供・協</td></tr>
<tr><td>農業生産法人株式会社田伝むし</td><td rowspan="3">講座講師依頼・協力</td></tr>
<tr><td>一般社団法人りぷらす</td></tr>
<tr><td>特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td rowspan="2">支援対象者の概要</td><td>・地域で就労に課題を持つ方の支援に取り組む NPO 法人等の支援者
・地域で人口流出による人材不足に直面している民間団体等の担当者
・就労に課題を抱える当事者の家族や同僚などの一般市民</td></tr>
<tr><td>実施期間</td><td>平成 28 年 6 月 16 日～平成 29 年 3 月 31 日</td></tr>
<tr><td>事業内容とスケジュール</td><td>6 月　プログラムオフィサー配置（小野寺）
7 月　事業スタート　開催場所について他団体との打ち合わせ（6 か所訪問）
8 月　講座開講準備（チラシ発送、テキストの作成）
9 月　「はたらく」をサポート　こころの健康を学ぶ講座　開講　＜全 7 回＞
（受講者：16 名）
10 月　11 月よろず相談所開催場所の検討
講座開講準備（チラシ発送、テキストの作成）
11 月「はたらく」をサポート　こころの健康を学ぶ講座　終講
「移動なんでもよろず相談所」　市内 2 か所で実施　（利用者：5 名）
12 月「移動なんでもよろず相談所」　市内 1 か所で実施　（利用者：1 名）
「ジョブコーチによる就労支援サポート講座」 開講　＜全 7 回＞
（受講者：9 名）
1 月　「移動なんでもよろず相談所」　市内 4 か所で実施　（利用者：5 名）
2 月　「ジョブコーチによる就労支援サポート講座」　終講
「移動なんでもよろず相談所」　市内 2 か所で実施　（利用者：8 名）
3 月　「いしのまきはたらくサポーターセミナー」開催　（参加者：40 名）
「移動なんでもよろず相談所」　市内 3 か所で実施　（利用者：15 名）
「コミュニティワーク実践講座」　＜全 6 回＞　（受講者 10 名）</td></tr>
</table>

事業費とその内訳	・事業費の総額　2,595,816 うち補助金額　2,330,000（国費 1,730,544　県費 599,456）自己負担 265,816 内訳（人件費，2,065,643 諸謝金，270,000 旅費，24,844 消耗品費，87,629 印刷製本費，39,580 通信運搬費，62,330 使用料及び会場借料，45,790）
具体の成果	【課題・事業の必要性】 ・石巻の転入者の減少と転出者の増加 平成 27 年度：転入者 6422 名 平成 27 年度：転出者 7104 名（うち 1046 名が仙台市へ転出） ・石巻の地域で地元企業への就労や支援活動を始めた移住者へ対する就労サポート（メンタル面）や地域コミュニティの場が提供できず、リタイヤしてしまい地元へ戻ってしまうケースが起こっている。そのため、まちに気軽に相談ができるようなコミュニティが必要であると同時に、セルフケアについて学びながら。こころの健康と被災地での仕事が充実できるようサポートする仕組みが必要である。 ・石巻圏域でのボランティア、NPO の活動人員推移 2011 年度：約 250,000 人 2012 年度：91,702 人 2013 年度：64,362 人 2014 年度：53,846 人 2015 年度：36,123 人 ・石巻で活動している支援団体の従事者が、震災から 6 年が経過する中、メンタルヘルスにおけるこころの不調を感じている方が出てきている。そのため、支援団体自身がこころの健康を学び合いながら、地域で働き続けることができるようなサポート機能があるとよいのではないかと考える。 ・平成 27 年石巻市、東松島市、女川市 新規就労者数 3082 名（ハローワーク経由） 離職者数 7714 名（雇用保険停止者数） ・被災者への就労支援において、就労後のフォローできる身近なサポーターがいないため、ドロップアウトしてしまうケースが増加している。ともに被災地石巻で働く方々にとってのこころの支えとなるコミュニティの場が必要である。 【事業成果（効果）】 ◆直接的効果 ・のべ 35 名が「いしのまきはたらくサポーター養成講座」を受講 ・34 名が移動よろず相談所を利用 ・40 名が“はたらく”をテーマとしたセミナーに参加 合計 109 名に対して暮らしや就労に関するサポートを展開することで、圏域の就労者や支援活動従事者の離職防止へつながる ◆波及的効果 地域で「はたらくサポーター」が養成されることにより、就労の場面で困難な課題に直面した場合に、はたらくサポーター自身のセルフチェックが可能となることや、周囲の方の SOS を拾うことが出来るようになるなど、多くの就労継続課題に対応することが出来るようになる。

	また、受講者から、養成講座で習得した知識を自身の暮らしや職場内で取り入れたことで、他者とのコミュニケーションの図り方など、以前より家庭・職場の雰囲気に変化があったと実践したことによる効果・反応の声も寄せられている。今回の取組で 35 名のサポーターが養成されたが、サポーターが知識・スキルを次の第三者へと伝える、教えることでより地域の「はたらくサポーター」が増加していくと考えられる。
29 年度以降の活動計画	当法人は現在石巻駅前にて「ユースサポートカレッジ石巻 NOTE」を展開している。今回の事業を通して圏域の NPO 法人等の民間団体や、現場の支持者や地域でご活躍されている方々、そして就労に課題を持つ就労希望者とのネットワークを持つことができ、今後はより一層個々の支援団体での支援だけではなく、圏域の様々な役割を持つ方々による、「面での支援」を実現することができる。被災地で活動する NPO 団体や、被災者に対する地域コミュニティで学ぶ機会の提供を継続的に行えるよう、地域・団体の方々に事業への理解・連携にご協力を頂きながら進めていく。29 年度以降も支援ネットワークを活かしながら、コミュニティワークの仕組みを広げていく。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった
	（上記評価の理由） 　他のＮＰＯ等と協働し、復興に取り組む住民や支援者の心のケアに取り組んだ点を評価する。取組の更なる発展により、今後より多くの被災者や支援者の心のケアに貢献することを期待する。

整理番号	（１）－５
事業名	南三陸町志津川高校内での学習支援居場所作り事業
事業実施主体と役割分担	【主体】特定非営利活動法人底上げ 【協力】宮城県立志津川高等学校
支援対象者の概要	宮城県立志津川高等学校全校生徒 258 名
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日～平成 29 年 3 月 31 日
事業内容とスケジュール	【概要】 　南三陸町志津川高校と連携し、昼休みと放課後の時間に学校内進路室を利用して学習支援を行った。授業の予習復習、課題・テストのわからなかったところをサポートした。具体的には、放課後に生徒から質問を受けたり、進路の相談、面接の練習含め広い範囲で支援することができた。また、先生方からの要望を聴き、3 年生の進学コースのホームルームの学習時間にも参加することができた。 【スケジュール】 通年：週 3 回、11 時～19 時まで学校内にて学習支援、前日準備 4 月　学校側と調整、生徒向けガイダンス、先生向けガイダンス、試験的に 1 週間開催 6 月　定期試験対策、キャリアガイダンス調整 7 月　キャリアガイダンス、大学生交流会調整 8 月　夏期講習、大学生交流会 9 月　定期試験対策、キャリアガイダンス調整 10 月　キャリアガイダンス 11 月　定期試験対策講座 12 月　3 年生向け入試前対策、冬期講習 1 月　1，2 年生向け大学生交流会 2 月　定期試験対策、今年度の振り返り、 3 月　来年度に向け学校側と調整、授業計画作成 【実施詳細】 ■92 日間の学習支援（生徒相談含む）−大きく分けて 4 つのサポートを行った。 (1)放課後学習のサポート 　放課後、学校の一室に自習室という形で場所を設けてもらい、出入りする生徒の自習の様子を見たり、質問があったら応じるなどのサポートを行った。具体的には週末の課題や授業で理解しきれなかった部分についての質問が多く、教科としては数学・英語が多かった。 (2)1 年生の補習テストのサポート 　志津川高校は、「チャレンジテスト」という中学までの復習テストを行っている。1 年生を対象に昼休み、放課後の時間に実施しており、そのサポートを行った。及第点まで達することができないと何度もテストを受けるので、多い時には 50 名を超す場合もあった。最後

	まで理解ができない生徒に対しては放課後に個別指導を行うこともあった。 (3)3年生の進学クラスのホームルーム学習のサポート 　進学クラスである3-4でホームルームの学習時間のサポートを行った。基本的にクラス全員参加で、数学や英語のプリントをもとに解説や丸付けを行った。 (4)生徒のメンタリング、カウンセリング 　学習をサポートしていく中で、なかなかやる気がおきない生徒や悩んでいる生徒に対してカウンセリング・メンタリングを行った。面談形式で座ってやる場合もあり、学校の教員や親には話せないことを話してくる生徒が多かった。
事業費とその内訳	総額：2,721,870 うち補助金額：2,249,000（国費1,814,580　県費434,420）自己負担472,870 内訳:人件費：1,959,459 　　車両維持費：361,197 　　旅費：2,680 　　通信費：43,909 　　使用料および会場賃：245,700 　　消耗品費：108,925
具体の成果	【課題・事業の必要性】 　南三陸町志津川高校では、震災から6年たった今でも高校生の約半数が仮設住宅で暮らしており落ち着いて学習できる環境がない。週末も学外で勉強できる場所は少なく、公民館などに行く交通手段も限られている。その中で町は仮設住宅の入居期限を７年目まで延長する「特定延長」の対象世帯が１６５世帯に上るとの見通しを町議会臨時会で示した。 　また2015年12月に志津川高校で取られた進路希望調査を見ると、進学希望者は1年生101名のうち59名(59.7%)、2年生85名のうち36名(42.9%)と進学希望者はいるものの、3年生の進学者数は109名のうち25名(22.9%)である(一般入試受験者は1名)。学年が上がるごとに大学進学を諦める生徒が多いことを示している。諦める理由として家の収入の問題とともに、学力に対するコンプレックスから大学進学をあきらめたという声も聴いている。 　志津川中学校にはNPO法人kidsdoorが支援に入り、仮設住宅に住む生徒に対して居場所と学びの場所は提供しているが、志津川高校には今まで外部団体が支援に入ったことはなかった。中学を卒業した後、高校で居場所を失った生徒からkidsdoorに連絡が入り、高校生向けに校外でフリースペースをしていた当団体にkidsdoorからサポートの要請が入ったこともあった。そうした現地のニーズを受け、高校と連携しながら高校生の居場所と学びのサポートを行っていく必要があると判断した。 【事業成果（効果)】 （■申請時記載事業成果　以下、成果） ■年間通算延べ360名の生徒が参加、放課後の居場所確保 92回の学習支援-学習支援は大きく分けて3つのサポートで構成された (1)放課後学習のサポート 　放課後の学習サポートでは特にテスト前はニーズが高まり、試験期間中は毎日開催することができた。成果としては、社会が苦手な生徒に暗記の方法と学習習慣が身につくようアドバイスしたところ、その生徒は成績が伸び、学年1位になった。順位が伸びただけでなく、

	自らの学習スタイルを身につけることができたことで、学習に対する意欲が湧き、希望進路も 4 年制大学へ変更した。 ⑵1 年生の補習テストのサポート 　補習テストでなかなか及第点が獲得できずにいた生徒に学習のサポートをしたところ、クラスで 18 位だった順位が 11 位にまで上昇した。苦手と言っていた数学の点数が 80 点台になるなど今では得意教科と言っている。 ⑶3 年生の進学クラスのホームルーム学習のサポート 　3 年生の進学クラスのホームルームの時間に行われる学習時間に入りサポートを行った。生徒との関わりの中で担任教員と協力しながら学習に対するモチベートすることができたため、一般受験者数が増加した。昨年一般受験者が 1 名だったことに対し、今年は公務員としての学習一般受験者が 13 名になった。学習に対しての意欲が継続したものと考えられる。 ⑷生徒のメンタリング、カウンセリング 　生徒が学習するにあたって、進路や家庭のことで悩んでしまうとなかなかモチベーションが上がらない。普段の会話からそのような声をキャッチし、カウンセリングが必要な生徒に対して面談を行った。なかなか学校になじめず欠席しがちな生徒に対して保健室の養護教諭と協力しながら生徒との面談を進めたところ、普段の生活に対しても前向きになった。また、学習に対する意欲が増し成績が伸び、赤点がなくなった。 ■参加高校生の学内試験順位平均 5 位向上 →具体的に何位上昇したかわかっていないが、多く参加した生徒は成績が上がったと報告を受けている。 ■参加高校生中 5 名が進路を進学に変更 →就職しか考えていなかった生徒が進学と迷っている様子を見せた。また、もともと専門学校だけに絞っていたが、成績が上がったことで四年制大学に変更した生徒もいた。 【波及的な効果】 ■町営の学習センターの設立 →町と協働して高校に学習センターを設立することになった。 ■一般受験者の増加 →今年は、昨年の 1 名より 6 名増加した 7 名の一般受験者がいた。
29 年度以降の活動計画	来年度は、志津川高校に町営の学習センターが設立されるため、学校付近に学習以外の居場所を設け運営していきたい。また、主体的に町に関わる仕掛けを作り、高校生たちの郷土愛と自己肯定感を引き出していきたい。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった

	（上記評価の理由） 　町や学校からの理解を得ながら、学習サポートやメンタリング、カウンセリング等により、生徒の居場所づくりや学習意欲の向上、心のケア等に貢献した点を評価する。

整理番号	（１）－６
事業名	絆を繋ぐ・地域コミュニティでの心の居場所創造事業
事業実施主体と役割分担	事業実施主体：特定非営利活動法人とめタウンネット（コミュニティサポート・人材育成）事業実施主体として本事業全体を総括する。 協力団体：特定非営利活動法人ウィメンズアイ（女性の社会参画・女性リーダー育成） 各地の女性ニーズの調査・発掘と女性への参加働きかけ等 協力団体 ：有限会社コンテナおおあみ（起業・創業者支援） コミュニティカフェ開業及び運営についての助言及びビジネスサポート 協力団体 ：みやぎ学生ボランティアユニオン（宮城県内大学の横断的ボランティア） 学生ボランティアのコーディネート・カフェ運営サポート 協力団体：三陸おさかなネット コミュニティカフェ開設講座補助 協力団体：特定非営利活動法人生活支援プロジェクトＫ コミュニティカフェ開設講座補助 協力団体：マモイ コミュニティカフェ開設講座補助
支援対象者の概要	本事業に於いて支援した方々の概要は主に講座出席者となることから地域ごとに以下の出席者が支援者となる。 石巻市地区 協力団体：三陸おさかなネット　講座累計参加者　６８名 介護支援団体や女性による手仕事支援団体のネットワークによる地域住民が主な参加者。団体の活動を更に充実・発展させたいとのことが参加理由である。また、石巻地域での沿岸部・市街地・周辺地域に繋がり作りを進めることも今後の課題と捉えている。 気仙沼市地域 協力団体：特定非営利活動法人生活支援プロジェクトＫ　講座累計参加者　６４名 生活支援や障碍者支援に取り組んでいる２つの団体を中心に講座へ参加いただいた。復興住宅に移り住んだ方々への居場所づくりの提案や、現在取り組んでいるサロンの発展形に取り組むために講座へ参加。それぞれの団体がカフェの設置による集客効果を狙っている様子。定期的にコミュニティカフェを開催する模様。 南三陸町地区 協力団体：マモイ　講座累計参加者　９４名 南三陸町の子育て世代のママさん達によるサークルが主体となって講座に参加。子育て世代の集まる場が現在存在しないことから、自ら活動拠点の開設や拠点運営を学ぶために講座を受講している。昨年の受講生も再度参加していただき自ら行っているコミュニティカフェの活動内容等も披露いただき、更なる居場所づくりへの機運が高まっている。 登米市地区 実施団体　特定非営利活動法人とめタウンネット　講座累計参加者　６９名 登米市の受講生は地域おこし協力隊や集落支援員など、地域コミュニティでの支援

	活動に生かしていく為に受講した方々が見受けられた。登米市では多くのコミュニティカフェが存在し各地域コミュニティの居場所として活用されている。現在の課題は継続的な運営手法と更なる集客であり、各地域ごとに活動しているコミュニティカフェの連携等も必要である。
実施期間	平成２８年７月１日から平成２９年３月３１日まで
	トライアルカフェ（登米・南三陸・石巻・気仙沼地域の４会場） 受講生が自分達の地域でゼロから作るトライアルカフェ開催に挑戦 シンポジウム（登米・南三陸・石巻・気仙沼地域の合同） コミュティカフェ開設講座の報告会と受講生の修了式 特別講演　漫画家　井上きみどり氏「お茶っこは世界共通！」平成 28 年 7 月 4 日（月）全体ミーティング ・平成２８年度　宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業の説明 ・年間活動内容について （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ 2 名　合計 4 名） 6 日（水）スタッフミーティング ・協力団体とチラシ発注作業について （参加者数：講師１名、スタッフ 2 名　合計 4 名）） 11 日（月）全体ミーティング ・南三陸説明会について、チラシ配布箇所の検討 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ 2 名　合計 4 名） 15 日（金）スタッフミーティング ・南三陸説明会にむけて進行・作業確認 （参加者数：講師１名、スタッフ 2 名　合計 3 名） 19 日（火）全体ミーティング ・気仙沼協力団体打ち合わせについて （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ 2 名　合計 4 名） 19 日（火）協力団体打ち合わせ（気仙沼会場） ・平成２８年度　宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業の説明 ・年間活動内容及び協力内容の確認 （参加者数：協力団体１名、事務局１名、講師１名、スタッフ 3 名　合計 5 名） 20 日（水）コミュニティカフェ開設講座　説明会（南三陸会場） ① コミュニティカフェ概論 ② コミュニティカフェ開設講座内容とスケジュールについて （まとめ） 南三陸町社会福祉協議会のご協力をいただき、研修会のお時間を頂いて説明会を行った。受講生の半数が復興住宅に転居予定の方であり、また年齢層の高い方が多く参加されていた。「お茶っこのみ」の場として、新たなコミュニティづくりの場として、コミュニティカフェやコミュニティカフェ開設講座に高い関心が寄せられた。 （参加者数：事務局 1 名、講師１名、スタッフ 2 名、受講者 25 名　合計 29 名）

25 日（月）全体ミーティング

・登米、気仙沼説明会にむけて進行等の確認

（参加者数：講師１名、スタッフ２名　合計５名）

30 日（土）コミュニティカフェ開設講座　説明会（登米会場）

① コミュニティカフェ概論

② コミュニティカフェ開設講座内容とスケジュールについて

（まとめ）

受講者には、「地域内に子どもの居場所を作りたい」という想いを持っている方が参加していただき、コミュニティカフェ開設講座に興味を持っていただいた。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者６名　合計 10 名）

30 日（土）コミュニティカフェ開設講座　説明会（気仙沼会場）

① コミュニティカフェ概論

② コミュニティカフェ開設講座内容とスケジュールについて

（まとめ）

受講者は、被災者支援や地域支援、障害者支援に携わる方が参加していただき、コミュニティカフェに興味や関心のある方が多かった。また、障害者を持つ方やそのご家族、そして支援する方の大変さをうかがえる地域性や課題なども出され、コミュニティカフェやコミュニティカフェ開設講座のニーズを強く感じられた。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 10 名　合計 14 名）

平成 28 年８月

1 日（月）全体ミーティング

・協力団体打ち合わせについて

・石巻説明会にむけて

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

2 日（火）協力団体打ち合わせ（南三陸会場）

・平成２８年度　宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業の説明

・年間活動内容及び協力内容の確認

（参加者数：協力団体２名、事務局１名、スタッフ３名　合計６名）

5 日（金）協力団体打ち合わせ（石巻会場）

・平成２８年度　宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業の説明

・年間活動内容及び協力内容の確認

（参加者数：協力団体１名、事務局１名、スタッフ３名　合計５名）

6 日（土）コミュニティカフェ開設講座　説明会（石巻会場）

① コミュニティカフェ概論

② コミュニティカフェ開設講座内容とスケジュールについて

（まとめ）

受講者は、石巻を中心に介護支援等をしている方、渡波で手仕事支援をいている方などであった。受講者の声に「震災後の石巻は支援慣れしている年配の人も多い、そのため活動することに難しさがある。」と石巻の現状を話してくれた方や、「震災後ある時期から、“支援”から“自分の活動”となってきていて、自分の意識も変化してきている。」と話してくれた方と、コミュニティカフェ開設講座に関心を持っている方が多かった。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名、受講者８名　合計 13 名）

8日（月）全体ミーティング

・説明会を終えての振り返り

・基礎講座にむけて

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

17日（水）全体ミーティング

・石巻、気仙沼基礎講座①にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

20日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座①（石巻会場）

① 事業説明、コミュニティカフェの目的・実情等

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

講師から、コミュニティカフェの概要を中心に、居場所づくりの場として、震災後のコミュニティづくりに向けてもニーズがあること等、コミュニティカフェの目的や背景についての説明があった。ワークショップでは、自己紹介を兼ねながら、地域の課題や自分の強みについて出し合った。受講生には、高齢者介護に携わっている方や地元のお母さんたちに手仕事の場を提供している方、子育て中の方等が参加していただき、それぞれの経験や想いも語っていただいたなかに、被災地ならではの現状や課題がうかがえた。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名、受講者８名　合計13名）

20日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座①（気仙沼会場）

① 事業説明、コミュニティカフェの目的・実情等

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

気仙沼会場では、受講者は地元で地域支援や被災者支援に携わっている方、障害者支援をしている方の参加が多かった。講座のワークショップでは、自己紹介も交えて、受講生の困った事や得意な事を出し合った。受講者が日頃から活動している経験からも、障害者や高齢者の困ったこと、不便と思うことも多く出されていた。

また講座については、「わかりやすかった」、「興味深い話であった」と受講生に好評であった。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名、受講者12名　合計17名）

22日（月）全体ミーティング

・南三陸、登米基礎講座①にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

23日（火）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座①（南三陸会場）

① 事業説明、コミュニティカフェの目的・実情等

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

南三陸会場の受講生は、実際に女川で支援活動をしている方、昨年の卒業生と、講座への想いを強く持って参加されていた。ワークショップを通して、南三陸地域の課題や震災後の人口減少や子どもの減少等、地域の状況や環境が変化している現状をうかがえる受講生からの話があり、コミュニティカフェのニーズを感じる講座であった。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名、受講者５名　合計10名）

23 日（火）<u>コミュニティカフェ開設講座　基礎講座①（登米会場）</u>

① 事業説明、コミュニティカフェの目的・実情等

② 課題抽出ワークショップ

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ１名、受講者 11 名　合計 14 名）

（まとめ）

自己紹介やワークショップ通して、参加者それぞれに、地域おこしや子どもの居場所等、地域課題や想いが感じられる講座であった。また、受講者の方それぞれに、コミュニティカフェに関心を持って参加されていた。

29 日（月）<u>全体ミーティング</u>

・南三陸、登米基礎講座②にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

29 日（月）<u>スタッフミーティング</u>

・台風による講座中止の判断と対応について

（参加者数：講師１名、スタッフ３名　合計５名）

30 日（火）<u>コミュニティカフェ開設講座基礎講座②（南三陸会場、登米会場）中止の対応</u>

（参加者数：事務局１名、スタッフ２名　合計３名）

平成 28 年 9 月

5 日（月）<u>全体ミーティング</u>

・基礎講座②、③（登米、南三陸）にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

6 日（火）<u>コミュニティカフェ開設講座　基礎講座②・③（南三陸会場）</u>

① コミュニティカフェの事例紹介、ワークショップを円滑に進めるために等

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

台風で中止となった基礎講座②の講話も含め、「うれしや」等のコミュニティカフェの事例紹介、ワークショップを円滑に進めるためのアドバイスやＳＷＯＴ分析について等、盛りだくさんな講座となった。またワークショップでは、南三陸地域の課題として“場所がないこと”、“子育ての不安”等が挙げられ、地域の居場所が節に求められていた。さらに受講者自身が感じている“どんな居場所が求められているか”についても、意見や考えを出し合うことができた。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名、受講者７名　合計 12 名）

6 日（火）<u>コミュニティカフェ開設講座　基礎講座②・③（登米会場）</u>

① コミュニティカフェの事例紹介、ＳＷＯＴ分析について等

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

講話では、講師から仙台市「うれしや」、登米市「つむぎカフェ」等を事例に、コミュニティカフェの紹介等があった。またワークショップでは、新たに２名受講生も加わり、様々な登米の地域課題が出されていた。またアンケートでは、「皆さまの“困っていること”を聞いて、様々な視点があることが分かり、勉強になりました。」という声を頂いた。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ１名、受講者 10 名　合計 13 名）

9日（金）スタッフミーティング

・基礎講座②（石巻、気仙沼）にむけて進行等の確認

（参加者数：講師1名、スタッフ3名　合計4名）

10日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座②（石巻会場）

① コミュニティカフェの事例紹介

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

講話では、コミュニティカフェの事例紹介を中心に、運営や集客などもそれぞれに工夫が必要となる話等があった。ワークショップでは、自分たちの持ちたい場をイメージしながら、“自分達のやってみたいこと・できること”を受講生で話し合いながら、石巻の地域性が異なること、地域によって価値観や考えに違いがあること、集客や資金面をどうしたらいいか、など具体的な課題についても話題となった。

アンケートでは、「毎回すごく勉強になります！」、「前向きになれる内容でした」「楽しい時間、学びの場でした。」という声をいただいた。

（参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者8名　合計12名）

10日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座②（気仙沼会場）

① コミュニティカフェ事例紹介

② 課題抽出ワークショップ

（まとめ）

ワークショップでは、気仙沼の地域性の難しさや地域の不便なことを踏まて、どういう“困っている人たち”に、どのような“地域の居場所づくり”して、受講生の“得意なこと”を活かして何ができるか等自分たちの持ちたい場をイメージして出し合っていった。

講座を通して、受講生から「自分のやりたい事、出来る事がわかってきました。」、「自分のビジョンが少しずつ明確になってきたように思います。」という感想をいただいた。

（参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者12名　合計16名）

12日（月）全体ミーティング

・基礎講座④（登米、南三陸）にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ3名　合計5名）

13日（火）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座④（南三陸会場）

① ワークショップの振り返り

② コミュニティカフェを持続させるための工夫

③ 地域資源抽出ワークショップ、模擬店開催にむけてのフリートーク

（まとめ）

基礎講座の最終回となり、受講生にも一体感ができあがっていた。コミュニティカフェの継続するポイントを中心とした講話と、これまでのワークショップの振り返りに加え、地域のいいところや強みについても出し合った。さらに、実践講座の模擬店開催に向け、“自分たちのやりたいこと・できること”を中心に、それぞれの想いを交えた意欲溢れるフリートークとなった。

（参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者9名　合計13名）

13日（火）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座④（登米会場）

① ワークショップの振り返り

② コミュニティカフェを持続させるための工夫
③ 実践講座にむけてのフリートーク
（まとめ）
コミュニティカフェ開設し、継続していくためのポイントを中心に講師から講話があった。講師から事業を継続するための具体的なポイントが多くあり、受講生も「参考になるお話が聞けました！」という声が多かった。
基礎講座最終回ということもあり、受講生の雰囲気もうちとけて、実践講座にむけて“自分たちのやりたいこと・できること”をテーマに、フリートークを行うことができた。
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ１名、受講者７名　合計 10 名）
16 日（金）スタッフミーティング
・登米会場、南三陸会場の基礎講座振り返り
（参加者数：講師１名、スタッフ３名　合計４名）
20 日（火）全体ミーティング
・基礎講座③（石巻、気仙沼）にむけて進行等の確認
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）
24 日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座③（石巻会場）
① 会議・ワークショップを円滑に進めるポイント
② ＳＷＯＴ分析について
③ 模擬店開催にむけてフリートーク
（まとめ）
講座は、ワークショップを振り返り、地域課題や地域資源、人的資源を共有し、ＳＷＯＴ分析の手法についての説明があった。また、模擬店開催にむけて、“自分たちのできること”テーマにフリートークを行った。
さらに、石巻会場の受講者が携わっている「一般社団法人　りぷらす」と、講師の「うれしや」の共同開催イベントについての事例紹介が講師からあり、コミュニティカフェの広がりを感じる講座であった。
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者７名　合計 11 名）
24 日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座③（気仙沼会場）
① ワークショップ振り返り
② 会議・ワークショップを円滑に進めるポイント、ＳＷＯＴ分析について
③ 模擬店にむけてフリートーク
（まとめ）
講座は、これまでの基礎講座ワークショップを振り返り、講師からＳＷＯＴ分析で意見やアイデアを掘り下げていく手法についての説明と、模擬店開催にむけてフリートークが中心であった。
実際に地域支援や障害者支援に携わっている受講生から、今回の講座で学んだ手法について「自分達の活動にも役立てられそう」という声を多くいただいた。
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 11 名　合計 15 名）
26 日（月）全体ミーティング
・実践講座にむけて進行・作業等の確認
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

平成 28 年 10 月

3 日（月）全体ミーティング

・基礎講座④（石巻、気仙沼）にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ 3 名　合計 5 名）

8 日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座④（石巻会場）

① コミュニティカフェを持続するための工夫について

② 石巻の資源出しワークショップ

③ 模擬店開催にむけてフリートーク

（まとめ）

講座の中で、「支援慣れした人から参加費をいただいて、手作りワークショップを継続することが大変。」という受講者の声があった。講師から、「直接でなくても、他にお金を集める手段がないか、…工夫が必要ですよ。」「例えば、支援団体が支援後に撤退した後の事例がありますが、支援後に地元の方々向けにノにウハウを引き継げる体制づくり等、継続できることが大切ですね。」といったアドバイスもあった。

４回の基礎講座を通して、石巻会場でも受講生の交流が深まり、実践講座に向けていい雰囲気が作られており、一体感が出てきていた。

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ 2 名、受講者 8 名　合計 12 名）

8 日（土）コミュニティカフェ開設講座　基礎講座④（気仙沼会場）

① コミュニティカフェを持続するための工夫について

② 模擬店開催にむけてのフリートーク

（まとめ）

講座は、「地域の居場所」をつくるための心構えやポイント、また事業を持続するためにはお金を回していく工夫も大切なこと等、講師の経験談も交えた講話であった。特に、講師が開催している「うれしや」でのイベントでは、講師の特技である“手芸・羊毛つむぎ”と“まちづくり”が結びついて、仙台と涌谷町の方々で交流を持つことができ、涌谷町の地域おこしにつながっていきそうな事例の紹介もあった。

フリートークでは、実践講座での模擬店開催に向けて話し合われ、４回の基礎講座で受講生の交流が深まり、それぞれの“やりたいこと・できること”が出されていた。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ 2 名、受講者 8 名　合計 12 名）

11 日（火）全体ミーティング

・石巻会場、気仙沼会場　基礎講座を終えての振り返り

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ 3 名　合計 5 名）

14 日（金）スタッフミーティング

・実践講座①にむけて進行等の確認

（参加者数：講師１名、スタッフ 3 名　合計 4 名）

16 日（日）コミュニティカフェ開設講座　実践講座①（合同）

① 各会場受講生の自己紹介

② コミュニティカフェ開設のための事業の組立てと経営について

（まとめ）

今回から 4 会場合同の講座となることから、まず自己紹介を行った。他の会場の受講生の活動や想いを聞いて、共感することやいい刺激となるところがお互いにあったようである。受講生の声に、「私と同じ世代の人が頑張っていて、励みになりました。私も頑張ります。」とあった。

また、基礎講座で要望が高かった「経営のこと」「資金について」の講話を、清野経営事務所の清野浩司先生に依頼し、初心者にもわかりやすくお話ししていただいた。アンケートでも多くの受講生が「今後につながる内容であった。」と回答があり、受講生からも「勉強になりました。」「心得がわかりました。」という声を頂いた。

講座終盤は、模擬店開催に向けて各自お店の概要を個別ワークシートに記入したり、受講生間で交流を図ったり、清野先生への個別質疑応答を行った。この時間は受講生にとって充実していたようで、ワークシートに記入することで頭を整理でき、また他会場の方と交流の場となりって和やかな雰囲気で、模擬店への意欲が伝わってくる講座であった。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講者 22 名　合計 27 名）

17 日（月）全体ミーティング

・実践講座②にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

22 日（土）コミュニティカフェ開設講座　実践講座②（合同）

・模擬店開催に向けて

（まとめ）

実践講座①で記入したワークシートを元に、各自の出店について紹介し、それぞれのお店について情報を共有し合った。さらにワークシートを取りまとめた模擬出店リストで、模擬店の概要や当日の流れ、出店場所とレイアウトの確認、準備物の確認、個別の調整等を行った。

模擬店としては、飲食・手作りの物販販売・ワークショップ・相談（障害者支援、介護者支援、健康と暮らしの相談）・体験会、キッズスペース等があり、来場していただいたお客さんがホッとできたり、気分転換となったり、ママのための場やお子さんと一緒に来られる場を提供したいと、受講生の想いを感じるお店が多く出店される予定となった。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講生 14 名　合計 19 名）

24 日（月）全体ミーティング

・模擬店開催にむけて進行・作業等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

31 日（月）全体ミーティング

・模擬店開催にむけて最終調整、作業等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

平成 28 年 11 月

3 日（祝・木）コミュニティカフェ開設講座　実践講座③：模擬店開催

【４会場の受講生による模擬店「もぎ店」を開催】

場所：登米市　アルテラスおおあみ

ＰＲ：チラシ配布（登米市佐沼地区を中心に）、各会場の受講生にチラシ送付

来客数：約３００人

（模擬店内容）

・カフェスペース：焼き菓子とドリンクの提供

・障害者支援　陽だまり：障害者と家族の支援相談

・くらしと介護の相談室：嚥下食の試食やアドバイス、介護相談

・まちの保健室：血圧測定などの簡単な健康チェックと健康相談、バザー商品の販売
・アトリエ　うっ布２：着物端切れを使ったワークショップ
・けせんぬま雑貨みさろ：手作りジャム、絵手紙、小物販売
・my favorite：デコレーションアート作品（写真立て等）の販売
・キラキラ曼荼羅＆編みもの体験：曼荼羅の点画体験、編みもの体験
・フットサロン　よつば：足つぼマッサージ体験
・大阪ドーナツ：大阪ドーナツの販売
・yome×café：繭玉ブローチ＆フラワーアレンジメントのワークショップ、キッズスペースとキッズ手形体験、ママサークルの手作り小物販売、フリーマーケット

（まとめ）

模擬店では、どの店にもお客さんが絶えずいらしてくれるほど、盛況であった。各スペースで受講生が連携して、声をかけながら、お客様を待たせないよう配慮したり、他のお店のPRをしたりと協力し合いながらできていた。また、受講生同士の交流も図れ、雰囲気よく模擬店を開催していた。受講生の声として、「いろいろな方々や団体と模擬店を開催できて、勉強になったし、楽しかったです。」、「自分の地域以外でイベントができて、新しいお客さんと交流できて良かった。」「他の模擬店の方々と一緒にできて、とても参考になった。」という感想を頂いた。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講者27名　合計32名）

4日（金）<u>スタッフミーティング</u>

・模擬店開催の振り返り

（参加者数：講師１名、スタッフ３名　合計４名）

7日（月）<u>全体ミーティング</u>

・実践講座④にむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

12日（土）<u>コミュニティカフェ開設講座　実践講座④（合同）</u>

① 模擬店開催しての振り返り
② 各会場開催　トライアルカフェにむけて

（まとめ）

模擬店の振り返りとして、各自振り返り用紙に反省点や良かったこと等を記入してもらい、発表してもらった。受講生の声として多かったのが、「今までやったことのない地域でイベントができ、お客さんと交流ができて良かった。」、「他の会場の受講生と模擬店で交流でき、気づきがあったり、参考になることがあったり、とてもよかった。」「お客さんが多すぎず、少なすぎず、模擬店としてやってみるにはちょうど良かった。」、「ゆっくり相談できる環境で、相談にきたお客様の話をじっくり伺えることができて良かった。」、「お客様だけでなく、自分達も楽しめたと思う。いい時間だった。」との感想をもらえた。また、「お子さん連れのお客様が多く、お客様に合わせた商品を持っていきたかった。事前に、お客様情報を教えてもらえるとよかった。」「スペースが狭かった。」「活動紹介や次につながるツール、DMや名刺等を用意していけばよかった。」「広告用のチラシをもっと早くほしかった。」という意見も上がった。

講座の後半は、トライアルカフェにむけて、会場ごとに現時点での方向性や内容を発表してもらった。今後は、それぞれの会場で打ち合わせを行い、開催にむけて準備してもらうこととなった。また各会場の協力団体の代表者に、進捗状況やトライアルカフェに向け主体的に活動してもらい、随時、連絡や報告等をしてもらうこととした。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講者 16 名　合計 21 名）
14 日（月）全体ミーティング
・実践講座④の振り返り
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）
21 日（月）全体ミーティング
・実践講座を終えての振り返り
・トライアルカフェにむけて進行等の確認
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）
28 日（月）全体ミーティング
・気仙沼会場開催　トライアルカフェにむけて進行等の確認
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）
28 日（月）登米会場受講生　打ち合わせ
・登米会場　トライアルカフェにむけて
（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ１名、受講者５名　合計８名）

平成 28 年 12 月
5 日（月）気仙沼会場開催　トライアルカフェ
【トライアルカフェｉｎ気仙沼】
場　所　：気仙沼市　はしかみ交流広場
開催団体；NPO 法人生活支援プロジェクトK、一般社団法人かもみ～る（協同開催）
開催目的：地域の住民同士のつながり作りと心身の健康を保持することを
来客数　：約３０人
（内容）
・カフェコーナー：コーヒーの提供
・はしかみ保健室：健康チェック（簡易測定）と保健師による無料相談
・クリスマス小物ワークショップ：クリスマス小物の手芸体験
・イギリス壁紙ワークショップ：イギリス壁紙を使った壁掛け作り体験
・雑貨屋さん　みさろ：手作りジャム、干支の手芸品、絵はがきの販売
・歌声喫茶：童謡から懐メロまで卓上ピアノで伴奏
・消しゴムハンコワークショップ：はんこを押してティッシュケース作り体験
（まとめ）
日頃からはしかみ交流広場を利用している方、地域の方、かもみ～るの、お客さん等が来場し、子連れのママ世代から年配の方までいろいろな方が足を運んでくれた。仮設住宅にお住まいの年配女性が、手作りするワークショップを楽しんでいたのが印象的であった。作ったものをお互いに見せ合い、コーヒーで一服しながらおしゃべりし、交流をしていた。
また、子ども連れのママは、消しゴムハンコのワークショップに参加して、その隣でスタッフさんとお子さんがハンコで楽しそうに遊んでいる姿も微笑ましくあった。「普段は、子どもと二人で日中を過ごしているんです。」と話してくれたママの言葉から、きっといい気分転換になったのではと感じられた。
今回のトライアルカフェは、今まで交流の無かった団体がコミュニティカフェ開設講座を機に交流が始まり、協力しあって協同で開催することができた。このことは、地域からも注目されており、地元新聞社である「三陸新報」の方も取材されていた。

違う団体と交流できたことで、新たなつながりができ、活動の幅も広がっていきそうである。さらに、受講生それぞれにおいても、充実感や満足度が高いものとなったようであり、次回の開催について検討していきたいとの声もでていた。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ２名、受講者 10 名　合計 14 名）

9 日（金）～11 日（日）コミュニティカフェ研修会

コミュニティカフェの現状を把握し知識見分を広めるため、東京都内の長寿社会文化協会で開催された認知症カフェの研修会に参加した。認知症の理解、認知症カフェの広がりや事例、コミュニティの再生等を座学やワークショップを通して知見をえることができた。

（参加者数：講師１名、スタッフ２名　合計３名）

12 日（月）全体ミーティング

・南三陸会場開催　トライアルカフェにむけて進行等の確認

・南三陸協力団体との調整

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

17 日（土）南三陸開催　トライアルカフェ

【クリスマスパーティ】

場　　所：南三陸町　入谷公民館

開催団体：ハンドメイドサークル mamoi

協力団体等：ママサークル　もこもこ、ジュニアリーダー

開催目的：親子の時間と居場所づくり（季節を感じるイベントに）

「mamoi」や「もこもこ」等の活動紹介

来客数：約６０人

（内容）

・カフェコーナー：子ども用飲み物、コーヒー、おやつの提供

・クリスマススノードームのワークショップ：親子＆子ども向けのスノードーム作り

・大魚！？魚釣りゲーム：プレゼントの一本釣りゲーム

・子ども服のおさがり交換会：おさがり品を持ち寄り交換

・ジュニアリーダーのお兄さん、お姉さんと遊ぼう！

・情報コーナー：本講座で交流のある団体のパンフレット、地域の子育て支援情報等

・お弁当とケーキで交流会

（まとめ）

今回は、南三陸町内の親子を２０組以上が参加して、子どもの声が絶えない明るく賑やかなイベントとなった。受講生やサークルのメンバーが協力して、町内の保育所や幼稚園全てにチラシを配布してイベントの告知を行ったこともあり、多くの方に参加していただいていた。

今回の開催テーマに、季節感のある親子の時間と居場所作りがメインとなっていたこともあり、親と子どもさんともに、カフェコーナーやワークショップを通じて、楽しみながら交流が図られており、よい場となっていた。お母さん達やお子さん達の笑顔と笑い声が印象に残る会で、来客者の反応もとても良かった。「今後も定期的に開催して、子育て中のママや子ども達が楽しめる場や交流できる場を作っていきたい。」と受講生の声があった。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講者４名、計９名）

19 日（月）全体ミーティング

・登米会場開催　トライアルカフェにむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

29 日（木）～１月３日　登米開催　トライアルカフェ

【川谷さん家の縁側カフェ】

場　所　：登米市豊里町　風の宿つむぎの家

来客数　：約２０人

（内容）

・12 月 29 日（木）昼の部　千鶴子さんのほっかほかランチ＆編み編みカフェ
珈琲焙煎体験会

・12 月 29 日（木）夜の部　景子さんの「本とおでんと日本酒の会」

・12 月 30 日（金）和美さんの愛犬のワンちゃんカフェとハンドマッサージ

・12 月 30 日（金）伊達巻づくり教室

・１月３日（火）川谷さんのたこ焼きパーティー

（まとめ）

受講生と卒業生による、それぞれの自分の得意を活かしたトライアルカフェとなった。告知は、受講生が友達や関係者など声をかけられるところで集客を図り、どの会も和気あいあいとした、アットホームな集いとなった。参加された方のいろんなご縁がつながり、充実した時間となったようであり、大変好評をいただくものとなった。

（参加者数：講講師１名、スタッフ１名、受講者６名、計８名）

平成 29 年１月

4 日（水）全体ミーティング

・石巻会場開催　トライアルカフェにむけて進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

10 日（火）全体ミーティング

・シンポジウム開催内容等の検討

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

16 日（月）全体ミーティング

・シンポジウム開催にむけての進行・作業についての検討

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

21 日（土）石巻開催　トライアルカフェ

【クラフトａｎｄケアいしのまき】

場　　所：石巻市　うしお荘

開催目的：　気軽に集えるお楽しみ会

来客数：約２０人

（内容）

・カフェスペース

・小物づくりワークショップ

・健康体操（誰でも気軽に参加！運動不足に）

・和代ちゃんのこんにゃく湿布体験会

・ミニ暮らしと介護の相談所

・お茶会体験

・フリーマーケット

（まとめ）

石巻会場でのライアルカフェでは、会場の確保が難しかったなかで、受講生同士が開催に向けて何度も打ち合わせをして、トライアルカフェを開催することができた。スタッフ一人ひとりの想いが込められた内容で、手づくりのワークショップや相談コーナー等でお客さんが癒されたり、ほっとできる場を提供できるものであった。

また、当日にスタッフさんに声がけで参加した男性の保育士さんが、急きょ、皆さんの前でギター片手にフォークソングを披露してくださった。心地の良いメロディーとゆったりした雰囲気のなか、スタッフやお客さん、受講生のお子さん達もその場を楽しんでいる様子がとても印象的であった。そんなお子さんの様子を見て、「その場の空気感が（自分の）子ども達にとっても心地良かったようで、そのことが嬉しいんです。」と受講生がお話していた。また、今後もこのようなイベントを企画していきたい意気込みを語っており、自分達でも開催できる！という自信となったようである。

（参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講者８名、計９名）

23 日（月）<u>全体ミーティング</u>

・トライアルカフェを終えて

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

30 日（月）<u>全体ミーティング</u>

・シンポジウムにむけて進行、作業等についての検討

・シンポジウムにむけて場協力団体との調整について

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

平成 29 年 2 月

6 日（月）<u>全体ミーティング</u>

・シンポジウム進行・作業等についての調整

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

13 日（月）<u>全体ミーティング</u>

・シンポジウム進行等の確認

（参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）

18 日（土）<u>コミュニティカフェ開設講座シンポジウム</u>

場　所：登米市　アルテラスおおあみ

時　間：　第１部　10：00～12：00

　　第２部　13：00～14：30

参加者数：約３０人

（内容）

〇第１部

漫画家・コラムニストとして活躍されている、井上きみどり氏が、世界各地を取材されたご経験をもとに、トルコ、エジプト、イタリア、ラオス等の各国・各地域の人々それぞれの食事やお茶事情をはじめ医療や暮らしについて、たくさんのスライドとともにお話ししていただいた。また、井上きみどりさんが手作りトルコ菓子とトルコ紅茶を参加者の皆さまにふるまってくださり、皆さまからもとても喜ばれ、和んだ雰囲気での講演となった。

	○第２部 　講師の足立千佳子氏から、今年度のコミュティカフェ開設講座の報告と成果について発表があった。今年度は、登米市、南三陸町の他に、石巻市と気仙沼市での開催が加わり、４会場で各４回の基礎講座を行った。基礎講座のワークショップをとおして、個々の理解を深めながら、地域の課題や困った事を共有していった。またそれぞれの強みや得意とすることを活かしながら、実践講座に向けて、また自分達のカフェに繋げるために、各会場が一つにまとまりながら講座が進行していった様子について等の報告があった。 　実践講座では、４会場が合同での開催となり、４回講座の中で各地域を回りながら、受講生が模擬店を開催するという実践的な講座の様子についてお話があった。受講生同士が模擬店開催にむけて協力し合い、地域を超えた連携が図られていったこと、また模擬店では他の団体の垣根を越えてお客さんとのいい関係を持てたこと等の模擬店開催の成果についても報告があった。 　トライアルカフェについては、各会場の代表者が発表を行った。 ・南三陸会場では、基礎講座の早い段階から「嫁カフェ」というテーマが決まってきており、ママだけでなく子ども達の居場所も考えながら、模擬店を開催し、そしてトライアルカフェへと繋げられたこと。トライアルカフェでは、クリスマスパーティーと季節感を持ちながら、子ども達もママ達も楽しんでもらえたことの発表があった。また、前年度の卒業生でもある後藤エミさんは、実際に自分でもコミュティカフェの活動をスタートさせたことについても報告があり、お客さんのママ達に喜んでもらえるだけでなく、開催場所のお店にもランチを食べてもらえて、WIN-WIN の関係が築けているとの報告もあった。 ・登米会場のトライアルカフェは、受講生の川谷清一さんの古民家のご自宅で開催された様子について、報告があった。登米会場の受講生がそれぞれに、また思い思いにトライアルカフェを行った時の感想や想い、大変だったこと等のお話しを個々にしていただいた。 ・石巻会場の代表の中山奈保子さんはご自身の活動である「三陸こざかなネット」について、また被災地石巻の様子も交えて、トライアルカフェにむけて石巻会場の受講生たちとの準備の様子や実際のトライアルカフェの様子、また参加者やお客さんだけでなく、一緒に参加したお子さん達が居心地の良い場となったこと等を報告していただいた。 ・気仙沼会場については、受講生が参加できなかったことから、講師の足立千佳子氏から写真をもとに、異業種の２団体が協力し合って、はしかみ交流広場で開催されたトライアルカフェが、「NPO 法人　生活支援プロジェクトＫ 」の地域のお客さんや「一般社団法人　かもみ～る」のお客さんも交えながら交流でき、とても喜ばれた様子について報告があった。また地元新聞紙の取材記事についても話があり、地元からも注目された取り組みであったこと等の報告となった。 　「コミュティカフェ開設講座」修了証授与式では、受講生に修了証にお渡しした後、登米市長の布施市長から第２部の講評をいただき、コミュティカフェの大切さを感じていること、そして可能性について期待を寄せているといったお話しがあった。 　最後に、井上きみどり氏から、第２部の総評をしていただいき、それぞれの受講生が一歩踏み出して実践していること、仙台ではできないような会場ごとに特色のある取り組みで素晴らしいと感じたこと、また会場ごとにトライアルカフェの感想をお話

	してくださった。 （参加者数：事務局１名、講講師１名、スタッフ３名、受講者 21 名、計 26 名） 20 日（月）全体ミーティング ・シンポジウ振り返り ・コミュニティカフェ MAP 作りについての検討 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名） 27 日（月）全体ミーティング ・コミュニティカフェ MAP 作り進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名） 平成 29 年 3 月 6 日（月）全体ミーティング ・コミュニティカフェ MAP 作り進行・作業の確認と協力団体との調整 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名） 13 日（月）全体ミーティング ・コミュニティカフェ MAP 作り進行・作業確認 ・コミュニティカフェ全国交流会にむけて打ち合わせ （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名） 20 日（祝月）コミュニティカフェ全国交流会　開設講座成果発表会 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名　合計４名） 21 日（火）全体ミーティング ・報告会にむけての打ち合わせ （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名） 24 日（金）復興に向けた絆力フォーラム in 宮城 ・コミュニティカフェ開設講座（トライアルカフェ等）の報告 （参加者数：事務局１名　合計１名） 27 日（月）全体ミーティング ・今年度事業のまとめ （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ３名　合計５名）
事業費とその内訳	総額 6,322,822 円 補助金額 5,690,000（国費 4,215,214　県費 1,474,786）自己負担 632,822 内訳 人件費 4,399,272 円、諸謝金 50,000 円、旅費 243,990 円、消耗品費 478,456 円、 印刷製本費 186,000 円、通信運搬費 122,744 円、使用料会場借料 334,360 円 募集広告費 208,000 円、委託費 300,000 円

具体の成果	事業目的 　地域住民や被災者等が気軽に集える居場所づくりを通じ、人と人との絆を深め、「心のよりどころ」となる場を創造する事を目的に、復興が進む沿岸部地域（南三陸町、石巻市、気仙沼市）においても講座を開催し、 被災者支援を継続している各地NPO 等と連携・協働し、地域の居場所づくりに 貢献していく為の一助とした。 事業背景 　震災から６年を迎え、多くの被災者が仮設住宅から、災害公営住宅等に移り住む年であり、移り住んだ先での新しい地域コミュニティを早急に作る必要がある。災害公営住宅等に移り住んだ事を復興と捉えがちだが、安心して生活を送るには、以前様々な社会課題が尚存在し､支援の取り組みは現在でも必要な状況にある事が確認できた。支援のニーズは大きく変わり始めており（心を許せる仲間づくりや、地域活動を通じたやりがいづくり、幾ばくかの生業創出等）自らが、主体的に活動する場を作りだす為の支援等に変化してきている。被災者の自立へのニーズは大きくなってきていると感じた。 直接的な事業成果 　本事業による直接的な事業成果は、実際に取り組んだトライアルカフェに於いて成果が表れており地域ごとに以下の通りの直接的成果を得る事が出来た。 石巻市地区 ①トライアルカフェの実施に向けて受講生の話し合いが合計５回程度開催され、綿密な打ち合わせを繰り返すことにより、居場所づくりの必要性を講座以外にも再認識することが出来た。 ②受講生が中心となり自ら参加者への声掛けや PR を実施し地域を巻き込んだ事業となった。 ③参加者は、お茶会体験・小物づくりワークショップ・こんにゃくシップ体験会など多世代の方々に参加いただけた。当日の会場は開成地区での実施となり開成仮設住宅の住民も数多く参加いただけた。 気仙沼市地区 ①気仙沼市階上地区にあるプロジェクトＫさんの「はしかみ交流広場」を会場に開催したが、気仙沼市内から多くの参加者が訪れた。参加者の多くは現在も仮設住宅にお住まいで、これからの住環境の変化についてなど積極的にお話ししていた。生活に対する課題等も話題になり、気軽に話せる場となっていたことが伺える。 ②一般社団法人かもみーるさんとの協働にて実施されたが、お互いの団体の活動を理解出来、協力体制を構築することが出来た。これからも、様々な機会を通じて団体同士の交流を深め、気仙沼の市民活動を推進していくとの意見も頂けた。地域の居場所づくりの担い手として今後の活動が大いに期待できる結果となった。また、今後も定期的(年間４回程度)にコミュニティカフェを実施していくことが確認された。 ③トライアルカフェの参加者から実際にカフェを開業したいとの相談もあり来年度の事業実施に向けて準備を始めている。

南三陸町地域

①南三陸町の受講者の多くは子育て世代のママさん達を中心としており、トライアルカフェも子供たちに向けたクリスマスイベントとなり、多くの参加者（１００名を超す）で賑わうことが出来た。

②南三陸町での子育てイベントは他のNPO等の主催により実施されているが、今回のような自主的な取り組みは初めてとの事であり、参加する方から主催する方へ今後の自立した活動への第一歩となった。今後も継続的に実施していくとのことである。

③昨年度の受講生も大いに参加いただき、今後、コミュニティカフェを自営している食堂の一角を活用して開設するとのことである。南三陸町では女性の活動出来る場所が限られており、活動拠点の必要性が明らかとなった。

登米市地域

①集落支援員として関西から移住された受講生が住む古民家を会場に、登米市内に於いてそれぞれ活動している受講生が集合し実施された。今回の講座への参加を通じてそれぞれの地域で活動している内容や、取り組みが理解することが出来、今後の活動に生かしていきたいとの事であった。

②栗原市から参加した受講生は４月を目標にコミュニティカフェを開設するとの事で、トライアルカフェではランチやスイーツなどを振舞っていた。また、話し合いをスムーズに進める為の、ワークショップについても体得できたようである。居場所づくりの担い手として大いに期待できる受講生の誕生となった。

③年末・年始の３日にわたりトライアルカフェが開催されたが、地域住民の方々や帰省された方々など、大変多くの方々で賑わった。帰省された親子連れなどは、このような取り組みが地域で行われることは初めてであり今後も参加したいとの意見を頂けた。親子連れの故郷へのＵターンにつながる事を期待したい。

波及的事業成果

①今回実施した４つの地域すべてに於いてコミュニティカフェを始めることが出来地域の居場所を開設することが出来た。

②４つの地域で講座を実施したことによる地域間ネットワークが構築された。これからは地域を越えた活動がそれぞれ期待できる。

③講座を開催したそれぞれの地域ごとに異なる地域課題が発生していることが理解出来た。また、共通の課題も数多く見受けられ連携して解決していく為の基礎を確立する事が出来た。

④トライアルカフェを通じて世代間の連携を図ることが出来、今回の成果をこれからの事業を通じて継続していく。

⑤講座を実施した各地域に於いて協力団体を募って実施したが、それぞれの団体が大きく成長し自ら居場所づくりを進めることが出来るスキルを得たようであり、今後各地域に於いて居場所づくりが活発に行われることが期待できる。

⑥今回の講座実施に当たって協力団体の中には福祉系の団体もあり、高齢者に対するコミュニティカフェ（居場所）の必要性が理解された。本事業によりそれぞれの地域に於いて高齢者を見守る体制づくりの一助としてほしい。また、今後立ち上がる自治会組織づくりのツールとしての活用も期待できる。

29 年度以降の活動計画	平成２７年度・２８年度と地域の居場所づくりを進める事業としてコミュニティカフェ開設講座を実施してきたが、２年で８０名を超える受講生を輩出することが出来、それぞれの地域に於いて自主的にコミュニティカフェやサロン、ワンディカフェなど様々な地域の居場所づくりが始まっている。よってコミュニティカフェ開設講座のみの実施については、本年度で一応の区切りとし、来年度に向けて更なる被災者の自立に向けた事業を展開する事とする。被災者の方々が今後自ら取り組まなければならない、地域課題の自己解決に向けた大きな３つの柱（居場所づくり・生きがいづくり・しごとづくり）に対する講座に取り組み、本当の復興に近づけられる事業を実施し、多くの方々の自立した生活の為の一助としていきたい。また、３つの柱の事業以外にも更なる地域課題抽出を行い、被災した方々の生活ニーズを理解し寄り添いながら安全安心な生活確保へと近づけていく。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった 各地域のニーズに合った、被災者が主体的に活動する場の創出に貢献した。各地域に活動の広がりが見られ、優れた成果があったものと評価する。

<table>
<tr><td>整理番号</td><td colspan="3">（１）－７</td></tr>
<tr><td>事業名</td><td colspan="3">人材育成と「みやぎ傾聴ネットワーク」交流研修会</td></tr>
<tr><td>事業実施主体と役割分担</td><td colspan="3">特定非営利活動法人　仙台傾聴の会</td></tr>
<tr><td>支援対象者の概要</td><td colspan="3">傾聴ボランティア養成講座では、大和町、川崎町、白石市、仙台市七郷地区、仙台市立病院ボランティア延べ 309 名を養成した。
「みやぎ傾聴ネットワーク」研修交流会では、美里町、白石市、登米市、富谷市、塩釜市、柴田町、仙台市七郷地区、七ヶ浜町の傾聴ボランティア団体との 124 名の傾聴ボランティアと研修交流会を実施した。</td></tr>
<tr><td>実施期間</td><td colspan="3">平成 28 年 6 月 16 日～平成 29 年 3 月 31 日</td></tr>
<tr><td rowspan="4">事業内容とスケジュール</td><td>７月</td><td>1,8,15 日 10：00～15：00　12Ｈ、３日間コース
大和町で傾聴ボランティア養成講座開催　16 名参加、（のべ 48 名）
大和町保健福祉総合センター「陽だまりの丘」にて。
11 日 11：00～12：30
美里町「ウサギの会」交流研修会、9 名参加
美里町駅東地域交流センター2 階会議室にて。</td></tr>
<tr><td>８月</td><td>3,18,25 日 10：00～15：00
川崎町で傾聴ボランティア養成講座開催
12Ｈ、３日間コース 25 名参加　（のべ 75 名）
川崎町健康福祉センターホールにて。
1 日 13：30～15：30
白石市「アイキララ」交流研修会 19 名参加。
白石市総合福祉センターにて。
8 日 10：00～12：00
登米市傾聴自主グループ 4 団体と交流研修会　参加者 18 名
迫保健センターにて。</td></tr>
<tr><td>９月</td><td>1 日 10：00～12：00
七ヶ浜町傾聴ボランティア「たんぽぽ」と交流研修会 8 名参加
七ヶ浜老人センター・きずなハウス内にて。
12 日 10：：00～12：00
「柴田町傾聴の会ほのぼの」「仙南いきいき傾聴の会」15 名参加。
柴田町地域福祉センターにて。
28 日 11：30～13：30
「仙台ほほえみたい」8 名参加
仙台市七郷市民センター和室にて。</td></tr>
<tr><td>10 月</td><td>7,14,21 日 10：00～15：0012Ｈ、３日間コース
白石市傾聴ボランティア養成講座開催
12 名参加　（のべ 36 名）白石市総合福祉センターにて。</td></tr>
</table>

11 月	4,11,18 日　12H　3 日間コース 多賀城市で「傾聴ボランティア養成講座」開催　参加者 12 名 （のべ 36 名参加。認知症サポータ養成講座と同時開催） 多賀城市市民活動サポートセンター3Ｆ大会議室にて。 30 日 10：00～12：30 富谷市傾聴の会交流研修会開催　参加者 27 名。
12 月	6 日、会員全体会開催 98 名参加 20 日 10：30～12：00 塩釜傾聴の会交流研修会　参加者 20 名
１月	24 日　10：30～1.5H 県税事務所　基本講座　参加者 15 名 30 日　仙台市豊齢学園　基本講座 90 分　参加者 120 名 仙台市シルバーセンター第 1 研修室
２月	1 日 泉区社会福祉協議会より依頼の「傾聴基本講座」　参加者 24 名 10 日 若林区民生員向け「傾聴基本講座」1H 若林市民センター　参加者 22 名 17 日 13：30～15：30 富谷市民生員向け講座富谷市成田公民館　参加者 61 名 22 日 栗原市「心の健康サポーターホローアップ研修」 栗原市市民活動支援センター多目的室　参加者 18 名
３月	2,9,16 日 仙台市七郷市民センター傾聴ボランティア養成講座 3 日間 7.5H コース参加者のべ 72 名 6,13 日 仙台市立病院「ボランティア養成講座」2 日間、6 時間コース 参加者のべ 42 名 7 日 片平市民センター社会福祉協議会福祉委員「傾聴基本講座」参加者 66 名

事業費とその内訳	事業費の総額　3,070,180 円 うち補助金額 2,735,000（国費 2,046,786　県費 688,214）自己負担額 335,180 その内訳 （人件費 2,865,000　　旅費 15,660　　消耗品費 46,510　通信運搬費 70,010 使用料及び会場借料 73,000　）。

具体の成果	事業目的・課題・背景 　震災から6年が経過し、被災者の中にはまだまだ心に負担を抱えている方も多くおり、その方々へ寄り添い、話を聴く「傾聴」が必要であると感じている。当会員の中でも震災で肉親を亡くされた方々がボランティアとして活動して頂いており、前年度発行の「こころの復興」の中でも記載しているが、「震災の事を書こうとペンを執ったが手が震えて書くことが出来なかった」と言う方もいる。「こころの復興」はまだまだで、癒されていない状況が伺える。 　被災者が傾聴ボランティアとして活動する機会が増えてきていることは、これまでの当会の傾聴活動も含めて、各被災者が「自分も誰かの役に立ちたい」との思いを持っていると考えられる。その為には、各所でのボランティア育成の場を提供することによって、多くの被災者にも身近にボランティア活動に参加出来る機会が得られる。そこから被災者の自立に繋がる効果が期待でききる。 　昨年の自殺者は21,897人と22,000人を切ったとの評価はあるが、1日にすると60人が亡くなっている。その対策としては、各地域の中で、「傾聴」のスキルを身につける人々の増加が望まれる。自殺予防には、「気づき、傾聴、繋ぎ、見守り」が求められ、その「傾聴」のスキルの普及啓発が必要であると考える。養成講座の中では自殺予防の内容にも触れている。 直接的効果（アウトプット） 　人材育成に関しては、「傾聴ボランティア養成講座」を5か所で開催し全体で延べ309名を養成した。これは地域の傾聴力の強化と各地域の中に「傾聴ボランティア」として活動する人材が増加し、近隣の支え合いに貢献できたと思われる。また、今後の地域包括ケアシステムの導入により多くの近隣の支え合いが必要になることは必至であり、地域福祉に貢献できる人材育成につながったと思われる。各地域における傾聴ボランティア育成で裾の拡大効果がみられた。 　「みやぎ傾聴ネットワーク研修交流会」では、10か所の予定であったが、昨年11/22の地震発生、避難勧告により、当日予定していた山元町での研修交流会は中止となった。8か所の「傾聴ボランティア団体」と研修交流会を実施し、日頃の傾聴に関する活動状況や対応の悩みなどを話し会い、各所ともに有意義な時間と好評であった。 　これまで、各地域に出向いての交流は行っていない状況だったので、年月の経過により、ボランティアの減少があった団体は今年度内での「養成講座」を実施するに至り、その講座には多くの参加者があり、会員の増加に繋がる効果が見られた。 　地域のボランティアの増加で、復興住宅での活動に繋がる効果が見られた。 波及的効果（アウトカム） 　「みやぎ県政だより」の掲載により、多くの方々への「傾聴」の周知が出来たと思われる。各地で単発の「傾聴基本講座」の開催が多くなった。また、「民生員向け講座を出前します」のチラシ効果も出ていると思われ、依頼されることが多くなった。 　昨年発行した「心の復興」のご縁で当会の賛助会員になって頂いているＡ氏が3/30日、学生を10名ほど連れて当会の活動状況の把握と交流に来られた。学生の考え方なども知る機会になり、有意義な交流になった。そこから、地元の学生を活かしていく活動も検討したいと感じた。

<table>
<tr><td>29 年度以降の活動計画</td><td>みやぎ傾聴ネットワークの研修交流は引き続き実施したい。
当会と学生、子供達の関わりによる傾聴＆交流が出来ればと思う。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価

（上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）</td><td>被災地の復興・被災者支援に関して，
☐Ａ：特に優れた成果が得られた
☐Ｂ：優れた成果が得られた
☑Ｃ：一定の成果が得られた
☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた
☐Ｅ：成果が得られなかった</td></tr>
<tr><td>（上記評価の理由）
「傾聴ボランティア養成講座」により延べ 309 名を養成し、各地域の傾聴スキルを持つ人材育成に貢献した点を評価する。取組の発展により、今後更に被災者自身がボランティアとして活躍できる機会となり、心のケアや生きがいづくりに繋がることを期待する。</td></tr>
</table>

整理番号	（１）－８
事業名	「あそびば」「まなびば」の講座運営事業を通じた、南三陸町の被災者と地域住民が自立、交流するためのサポート、見守り事業
事業実施主体と役割分担	特定非営利活動法人びば！！南三陸
支援対象者の概要	南三陸町や登米市で避難生活を送る被災者等の地域住民を対象
実施期間	平成２８年６月１６日から平成２９年３月３１日まで
事業内容とスケジュール	・　事業概要 　南三陸町で避難生活を送る被災者等の地域住民を対象に、15 種類の講座運営を実施し、講座に参加していただくみなさんが、講座参加を通じて避難生活で疎遠になってしまった地域の人たちとのつながりや再会ができる場になるよう、講座実施が地域住民にとって自立、交流するためのサポート、見守りとしての機会とする。 ・　事業目的・課題・背景及び取組内容とスケジュール 　団体の今事業を通じた目的は、震災がきっかけでシルバー人材センターが解散し、地域の高齢者の皆さんの大きな活動先のひとつが流出したことから、高齢者がイキイキと活動できる場所を創出することである。 　震災復興が進む南三陸町で、とりわけ高齢者が活躍できる場が震災前より減少し、仮設住宅などでは、男性の引きこもりなどが課題とされている。そこで、今事業を通じて、震災前のように高齢者の皆さんが地域で必要とされ、地域の要望に応える機会を作り出そうと今事業を実施し、人材育成と地域住民の皆さんとの交流事業を促進していきたいと考えた。 　当団体では、活動場所の運営をしながら、今事業での機会を創出する事業を通じて、地域の人たちが講座に参加しやすいよう、講座の分野を「あそびば」「まなびば」「むすびば」と 3 つに分け、事業を実施していく。 　事業の対象者を南三陸町で避難生活を送り被災者等の地域住民とし、参加者自らが講座に参加したくなるよう、講座の中身が楽しそうで、そして、参加しやすくなるようこのような名称にした。すべての講座に共通しているのは、「むすびば」である。 　「単に好きな講座に参加し、成果物を作って帰る。」というのではなく、参加者同士が協力したり、途中、休憩時間を挟み、コーヒーやお茶の時間を通じて、会話に華を咲かせる機会を作る。 　参加者自身が、楽しい講座に参加するという動機と楽しい雰囲気の中で震災前の知り合いに、震災後に初めて再会する、話をする、などという大切な機会を生み出し、避難生活や高台移転で不安が多い地域住民のための安息した時間と空間を生み出していきたいと考えている。

これらの分野をキーワードにした講座と技能習得を目指した講座を通じて、生活支援や心のケアに役立てられる取り組みを実施した。（以下、実施予定講座と「あそびば」「まなびば」「むすびば」に関連する表を参照）

私たちの講座に参加していただく対象者は、南三陸町の地域住民の皆さんであり、とりわけ、復興が進む町で取り残されがちな高齢者をターゲットとしている。
さらに、講座の開催日時を平日の9時～16時までの時間帯で開催することを勘案すると、仕事が一段落した地域の皆さんが対象となることが多い。

○「あそびば」「まなびば」事業…趣味の講座や実用的な講座を通じて、楽しく時間を過ごし、学びあう機会を創出。
○「むすびば」事業…「あそびば」「まなびば」事業を通じて、新たな地域の絆づくりを創出しサポートする事業

○実施予定講座と実施予定頻度、実施場所について

	講座実施予定回数 講座実施数	目標受益者数 受益者数	あそびば	まなびば	むすびば
エコクラフト講座 （毎週火曜）午前・午後	65回 88回	のべ300名 のべ484名	○	○	○
エコ平板講座 （毎週木・金曜）午前・午後	今事業対象外	今事業対象外	○	○	○
陶芸講座 （毎週木曜）午後	5回 14回	のべ15名 のべ38名	○	○	○
視察 （第２水曜）１日	9回 10回	のべ135名 のべ238名	○		○
うたごえ喫茶 （第３木曜）午前	5回 5回	のべ55名 のべ29名	○		○
日曜大工講座 （第３水曜）午後	今事業対象外	今事業対象外	○	○	○
碁会所 （第３木曜）午前	5回 6回	のべ20名 0名	○		○
習字講座 （毎週金曜）午後	18回 27回	のべ50名 のべ120名		○	○
草刈り講座 （月２回不定期）午前・午後	今事業対象外	今事業対象外		○	○
植木剪定講座 （月１回不定期）午前・午後	今事業対象外	今事業対象外		○	○
墓地清掃講座 （月１回不定期）午前・午後	5回 34回	のべ15名 のべ104名		○	○
グラウンドゴルフ講座 （月１回不定期）午前・午後	0回 0回	0名 0名	○		○

地域学び塾講座 （月１回不定期）午前･午後	5回 1回	のべ50名 のべ11名		○	○
活動相談会 （毎週月曜）午後･午後	15回 29回	のべ100名 のべ8名			○
広報誌発行 （月1回）	9回 9回	のべ49500世帯 のべ49500世帯	○	○	○

【スケジュール】

７月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
８月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
９月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
１０月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
１１月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
１２月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
１月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
２月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）
３月	講習会実施（月曜日～金曜日） 南三陸町全域への広報（月１回）

事業費とその内訳

・ 総額
4,620,677円
うち補助金額3,769,000（国費3,080,451　県費688,549）自己負担額851,677

・ 内訳　人件費2,756,254円
諸謝金140,568円
消耗品費146,617円
印刷製本費1,463,912円
通信運搬費113,326円

具体の成果	【課題・事業の必要性】 　私たちの活動の基盤は、震災後に解散されたシルバー人材センターの活動である。地域の元気な高齢者のみなさんが、地域住民の要望に応えて、多くの地域活動をしていた。そのような活動が建物の流失によって、活動拠点がなくなり、事務局が機能しなくなったことで、解散せざる負えない状況となった。 　震災以降、高齢者の引きこもりや外出機会の減少が懸念される中、震災以前に活発に活動をしていた高齢者を中心とした組織を作り、現在のＮＰＯ法人びば！！南三陸が生まれた。 　今事業を実施する南三陸町では、高台の移転、災害公営住宅への移転などが平成２８年度中にほぼ完了すると予測されている。避難生活から安定した日常へと生活環境が激変する中で、当団体が昨年から実施している活動を通じて、活動に参加された皆さんから、避難生活を送ってきた５年間で築き上げたコミュニティから離れたくない、新天地でまたコミュニティを築くのが困難かもしれない、といった不安の声が多く寄せられている。 　そのような背景の中で、高齢者世帯の方や地域で必要とされる産業の雇用にうまくマッチングしない２０代後半～４０代の方やご家族の方からの相談が今年度に入り増えてきている。私たちは、これらの現状を南三陸町の地域の課題を捉え、講座実施を通じて、地域の絆づくり、地域の声･課題、行政の福祉サービスや雇用サービスで漏れてしまう人たちの声を拾い、課題解決の一助となるような連携を図っていきたいと考える。 【事業成果（効果）】 〇直接的な効果（アウトプット） 　毎月１回発行する広報誌を通じて、当団体が実施する活動を知り、活動参加者自身が好きな講座にエントリーすることが、日常に変化をもたらす結果となった。 　今事業の対象講座での参加者数はのべ 1,032 名の参加、実施講座については、214 講座を実施することができた。 　そして、講座の参加を通じて、参加する人同士が楽しい雰囲気の中で共通の趣味や話題が出やすい環境を創出することで地域のつながりの再構築や人間関係の新たな構築の一助となりうることができた。具体的には、講座の実施時間中に適宜お茶っこの時間を設け、テーブルを囲んで皆で休憩をとる時間を共有している。しかし、講座の様子をうかがっていると、活動中に無意識に話している会話のほうが、本音が出ているような気がする。やはり、楽しいことや興味を持っていることをしながら会話をすることが違和感なく、話をしているのだと、感じている。 　具体的な事例としては、１月から活動に参加された方を紹介する。

	【60代　女性　住まい：登米市】 　生まれは、南三陸町の方。以前からここの活動を知っていたが、友達に誘われて一緒に来所する時間を調整するのに時間がかかってしまい、初めての参加が１月になった。しかし、初回の講座に参加し、興味がある講座を２～３講座参加し、３月末までに毎週、毎日のように講座に参加することとなった。 「一人で臆することなく、早く参加しておけばよかった～。」とニコニコの笑顔で語られ、冬の間は、パートで働いている仕事がお休みになるので、家で趣味をしているよりもとても楽しい、と語られている。一人暮らしで年金とパートで生計を立てているが、無理のない参加費と友達の会話がとても楽しく、４月以降は、パートのシフトを積極的に周りと調整し、一つの講座については、参加できる限り参加したいという意向をいただいている。 〇波及的効果（アウトカム） 　今事業を通じて、地域の高齢者が活躍する場と町民同志の交流機会を創出し増やしていくことで、彼らの生活環境改善、健康管理、相互の見守りによるセーフティーネットとして徐々に機能してきたと思う。利用者の年齢層が広がり、事務局として受け入れ態勢や対応について、南三陸町役場の保健福祉課の保健師さんと連携をとるようになり、２９年度からは、健康相談などを定期的に実施していただけるような連携が取れ始めている。
29年度以降の活動計画	引き続き、活動の運営、例えば、講座単位での運営をそれぞれの参加者同士で役割を担い、自立した運営がされることで経費の負担が軽減され、持続可能な運営体制を目指していけるようにしたいと考えている。そこで、昨年度までの活動を踏まえ、復興が進む南三陸町で地域住民が主体となり、行政と連携しながら活動ができる団体として益々成長していきたい。 　２９年度以降は、今年度の活動の経験を通じ、講座の運営を円滑に実施できるようになり、参加者からの参加費を基に運営を継続していく見込み。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　地域住民が活躍する場との交流機会の創出により、心のケアや生きがいづくり、コミュニティ形成等に貢献している。今後、継続に向けた取組、行政等との協働に期待したい。

整理番号	（１）－９	
事業名	南三陸地域支援	
事業実施主体と役割分担	宮城県臨床心理士会	
支援対象者の概要	南三陸町の仮設住宅に住む住民、災害復興住宅・高台に移転した住民	
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日から平成 29 年 3 月 31 日まで	
事業内容とスケジュール	６月	・カフェあづま一れ訪問１回（利用者：15 名） ・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：戸倉中学校仮設住宅（参加者：11 名）
	７月	・カフェあづま一れ訪問３回（利用者：45 名） ・ママかふぇ：夏祭りへの参加（利用者：40 名） ・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：志津川自然の家仮設住宅（参加者：23 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：9 名）
	８月	・お茶っこ会実施：平成の森仮設住宅談話室（参加者：20 名） ・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：戸倉中学校仮設住宅（参加者：5 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：11 名）
	９月	・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：志津川自然の家仮設住宅（参加者：12 名） ・お茶っこ会実施：平成の森大会議室（参加者：8 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：10 名）
	10 月	・お茶っこ会実施：平成の森仮設住宅（参加者：19 名） ・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：戸倉中学校仮設住宅（参加者：5 名） ・活動会員ミーティング（参加者：11 名）
	11 月	・お茶っこ会実施：平成の森仮設住宅（参加者：10 名） ・地域間交流（寄せ植え）・お茶っこ会実施：志津川自然の家仮設住宅（参加者：18 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：10 名）
	12 月	・ママかふぇ：アリーナ開放・クリスマス会への参加（利用者：9 名） ・お茶っこ会実施：平成の森仮設住宅（参加者：10 名） ・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：戸倉中学校仮設住宅（参加者：3 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：9 名）
	１月	・お茶っこ会実施：平成の森仮設住宅（参加者：17 名） ・お茶っこ会・わらすこクラブ実施：自然の家仮設住宅（参加者：12 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：9 名）
	２月	・お茶っこ会実施（平成の森仮設住宅：参加者：14 名） ・ママかふぇ：アリーナ開放・バレンタインチョコ作りへの参加（参加者：15 名）

		・活動会員ミーティング実施（参加者：8 名）
	３月	・お茶っこ会実施：平成の森仮設住宅（参加者：10 名） ・お別れ交流会実施：南三陸 海のビジターセンター（参加者：15 名） ・活動会員ミーティング実施（参加者：9 名）
事業費とその内訳	事業費の総額：734,983 円 うち補助金額 661,000（国費 489,988　県費 171,012）自己負担額 73,983 内訳　人件費：217,296 円、旅費：309,015 円、消耗品費：180,989 円、印刷製本費：16,875 円、通信運搬費：9,478 円、使用料及び会場借料：1,330 円	
具体の成果	【課題・事業の必要性】 ・東日本大震災から 5 年が過ぎ、南三陸町では災害公営住宅等へ転居していく住民がいる一方で、移転の目途がたたない住民もいる。現在このような格差が問題となっている。また、住環境が度々変わることによって高齢者を中心に過大なストレスが生じたり、仮設住宅で築かれた繋がりが断たれたり、急激に進む被災地の復興についていけず人知れず悩みを抱える被災者が増加していくことも予想される。当事業は震災の発災後 2011 年 12 月から開始され、被災地・被災者のコミュニティ形成やメンタルヘルス維持のための活動を継続してきたが、上述のような理由で復興の転換期となると予測される平成 28 年度は、とりわけこのような支援活動を継続する必要性を感じている。 【事業の成果】 ・カフェあづま一れの訪問や巡回お茶っこ会の中で、寄り添いながらことさら深めることなく傾聴を続けることで、震災体験や喪失体験、時には希望などの様々な思いが語られた。このような「あるがままを受けとめられた」という体験は、参加者のストレス軽減に役立ち、住民の精神的不調の予防となったと思われる。 ・震災に関わる遺族ケアは事業の重要な機能であり、残された者が心理士との交流を通して日常的な支えや見守りを感じることができたならば、それは事後介入の意味も持ったと考えられる。 ・宮城県臨床心理士会が行っている社会活動の一環である電話相談のリーフレットを現地に持参し、配布した。時には住民との間で電話相談が話題に上がることもあり、自らの悩みをそっと打ち明ける住民や、ひそかにリーフレットを持って帰る住民もいて、精神的な健康を維持するための一助になったと考える。 ・仮設住宅から災害公営住宅や高台への移転により、これまでとは違った新しいコミュニティを再生していかなければならない住民に対し、巡回お茶っこ会や地域間交流等のイベントを通してコミュニティ全体に関わることで、住民のレジリエンス（回復力）を高め、エンパワーする効果があった。同時に、“わらすこクラブ”とのコラボレーションにより世代間交流の場ともなり、新しいコミュニティ作りの一助となったと考える。 ・波及的効果としては、派遣心理士が継続的に情報を共有し、見守りながら現地機関とも連携していくことで、抑うつやアルコールの問題などの自殺の危険因子を把握する危機介入的効果があったと考える。	
29 年度以降の活動計画	これまで連携して活動してきた企業や地元機関との繋がりを大事にし、今後も現地のニーズをくみ取りながら、ニーズに合った支援をしていく予定である。	

評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった
	（上記評価の理由） 　専門家による傾聴活動により、被災者の心のケアに貢献したと評価する。取組の継続と共に、現地のニーズに合わせ発展していくことを期待する。

整理番号	（１）－１０
事業名	農業と食を生かした若林区復興プロジェクト
事業実施主体と役割分担	・事業主体 一般社団法人 ReRoots ・協力団体 東六郷・東部かあちゃん’ず…六郷地区の取り組みへの共催 農事組合法人せんだい・あらはま…ひまわりプロジェクト協力　農地提供 若林区まちづくり協議会…わらアート制作、展示、イベント協力 各町内会…祭での実施協力
支援対象者の概要	六郷・七郷東部沿岸地域住民
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日から平成 29 年 3 月 31 日まで
事業内容とスケジュール	【取り組み内容】 1)農村の女性の力を引き出す食プロジェクト 　震災後、若林区南部の六郷地域は人口が半減して約 200 世帯となり、地域再生のために、5 集落の町内会役員を中心として今後の街づくりを検討する「まちづくりワークショップ」が若林区のもと開かれている。ReRoots も地域団体として参加しているが、町内会役員などの参加者構成から若者や女性の意見が反映されにくい。同時に津波被害による人口減少や農業をはじめ地域を担う若者の流出という六郷地域の被災後の課題に向き合うより、小学校の跡地利用などの目に見えやすい結果を追求しがちである。したがって、ワークショップには引き続き参加しつつも、六郷地域に被災後の課題に取り組める別の流れを作り出す必要性がある。既存の農村秩序には抗わずに町内会と連携しつつ、女性、農家、PTA などと築き上げていく。主体は女性たちが悩みや六郷地域の課題を話し合う「東六郷・東部かあちゃん‘ず」であり、ReRoots も一緒に討議へ参加しているが、六郷地域の活性化に向けた具体策がでていない。そこで、女性の力を「食」を通じて引き出し、そこから農業と食を地域資源として発見させ、集落の垣根を取り払い、自分たちで六郷地域を元気にし、人を引きつけ、若者に魅力を感じてもらうプロジェクトとして、食の交流イベント「かあちゃん’ずカフェ」を 10 月に行った。具体的な内容としては、東六郷小学校で開催し、芋煮や白玉ずんだ、焼き芋などを地域の人々に提供し、アロマキャンドルづくり体験を行った。 　ReRoots は企画の実施までは積極的にかあちゃん‘ずの会議に参加し、かあちゃん’ずのメンバーの主体性を引き出し、意識が若林区に向くように促していった。また、企画を運営していく中でかあちゃん‘ずのリーダーは課題を抱えたり悩んだりしたが、ReRoots はかあちゃん’ずのメンバーがなかなか手の届かない部分(パンフレットやタイトル看板の作成など)をサポートした。企画当日も手伝いとして活動に入ることで企画の成功に貢献し、かあちゃん‘ずのメンバーが継続して企画をやりたいと思えるような機運作りを目的としていた。 2)農村ツーリズム 　人が減少した被災地に地域資源を活用しファンを創出することで外部から人の往来をつくる政策である。 ①三本塚市民農園は被災後 2012 年に開園し、現在１６区画が利用されている。仙台市中心部から人口が減少した被災地へ人の往来をつくり、地域住民との交流を生み出すことでコミュニティづくりと地域再生を促す取り組みである。市民農園は畑の管理のために、毎週被災地外から人がやってくる。今年度からは隣にある約 10 アールの

	空き区画にベリー（4 品種 5 本ずつ、計 20 本）を育てることで、三本塚交流ベリー園を作り出す。津波被災後若林区に果樹と呼べるものは無い。市民農園利用者やこどもたち、地域住民が摘み取り体験やジャムづくりなどの五感を感じた体験活動を生み出せる。また、市民農園通信を発行して近隣に戸配し、住民にも定期的な活動を報告する。なお、利用者と地域住民との交流企画として夏にバーベキュー、秋には芋煮会を開催し、コミュニティ農園としての地域づくりを行う。８月には、ReRoots と利用者、利用者同士の交流の場を提供し利用者に現在の若林区の復興状況を伝えることを目的とする若林区の野菜を使用したバーベキューを開催した。この企画は、参加者と積極的に交流することで ReRoots と利用者の関係形成を進めるとともに、利用者に若林区の農業に対して関心をもってもらうことを目的としている。11 月には芋煮会を開催した。この企画では、八月のバーベキューでできた利用者同士、利用者と ReRoots の関係を深めるとともに、バーベキュー企画から継続して参加者から震災や若林区について話を聞くことで参加者の意識を若林区に向けさせ、ReRoots の活動を周知すると同時に参加者の若林区に対する考えや視野を広く持ってもらうことを目的としている。 ②「いくっちゃ若林～田畑の復興ツーリズム～」は、ひまわりプロジェクト（2012 年～）、おいもプロジェクト（2013 年～）ともに安定して固定客を得ている。人口減少や若者の流出というさびれた状況に対して、農業体験や自然体験として被災地外から人（主に家族連れや若者）を呼び込み（毎年累計 100 名以上）、地域に魅力を発信している。農家の講師のもと種まきから収穫までを数回に分けて栽培に取り組み、若林区のファンを作り、地元住民の元気を引き出して若林区の良さを地域外へ発信する。地元住民と企画を行うことで人を呼び込むというモデルケースを示し、地域住民主体のツーリズムを行う機運づくりとする。 　ひまわりプロジェクトは６月と９月に開催した。６月の第１回ひまわりプロジェクトでは参加者にひまわりの種植え体験をしてもらい、その体験を通して若林区の田園風景や自然を体感してもらうことで若林区の復興の現状を知ってもらうことを目的としている。また、ひまわりオイルを使った料理やキャンドルなどの企画を用意することで参加者の思い出に残りまた若林区に来たいと思えるような機運作りも目的としている。９月の第２回ひまわりプロジェクトでは、ひまわりの種の収穫を行った。この企画を通して参加者に若林区の景観の課題だけでなく、農家の後継者不足や過疎化といった目に見えない課題が生じているのを知ってもらい、ツーリズムの必要性、ReRoots がツーリズム活動をしている意義などを伝えることを目的としている。 　おいもプロジェクトは５月と８月、１０月に開催した。５月の第１回のおいもプロジェクトではさつまいも、里芋、枝豆の播種と定植、若林区の野菜を使用した昼食の振る舞い、若林区の農家による講話を行った。これらの企画を通して参加者が身近な視点から自らの食生活を見直したり若林区の特長を理解するきっかけになることを目的としている。また、おいもプロジェクトを通して参加者と ReRoots の関係形成を図り、若林区でツーリズム活動を行う意義を実感してもらうことを目的としている。８月の第２回のおいもプロジェクトでは、第１回で植えた枝豆の収穫、サツマイモのつる返し、里芋の追肥、オクラの収穫を行い、若林区の野菜を使用した昼食を振る舞い、若林区の農家による講話、ずんだ料理づくりを行った。第１回企画からの関連から、継続して参加してもらうことで農業体験から実践(実際に収穫した野菜を調理して食べるということ)までの流れを通じて食育を実感してもらうことを目的としてい

る。また、若林区の野菜を使用した料理を振る舞ったり実際に調理することで参加者の意識を若林区に向けさせ、若林区の良さを実感してもらい、第３回おいもプロジェクトへ意識を発展させることを目的としている。10 月の第 3 回おいもプロジェクトではさつまいもと里芋の収穫、芋煮、若林区の農家による講話、いもフォンデュを行った。第 1 回、第 2 回のおいもプロジェクトから継続して参加者と関係形成を進めることで参加者同士、参加者と ReRoots の交流の場と認識してもらうことを目的としている。また、種植えから収穫という農業の一連の流れを体験することで、食育という観点から若林区の農業に関心を持ってもらい、そこから若林区の魅力を見いだし、若林区に足を運ぶ機運作りを目的としている。

③わらアートはようやく再開した田んぼのわらでオブジェ（高さ５メートル）を作り出し、アートによって人を呼び込む企画である。2015 年には若林区役所や若林まちづくり協議会とも連携して仙台市営地下鉄東西線の荒井駅（若林区七郷地域）開業のメインイベントとして大々的に行なわれ、約 3 万人が来場した。制作にあたっては地元小学校（17 校）によるわら束づくりも行われた。今年は、被災から再開する農業園芸センターで収穫体験や復興のシンボルとして９月に制作した。9 月 17 日には農業園芸センターでわらアートオープンイベントを行い、わらアートを展示すると共にわらを使ったワークショップを地域住民対象に行った。このイベントは若林区に多くの人を呼び込み、住民が主体となって若林区の魅力を発信し若林区外から人を呼び込もうというツーリズムの機運作りを目的としている。

取り組みスケジュール

年	月	取り組み内容
2016 年	7 月	市民農園運営 ツーリズムの実施 かあちゃんず役員会議 六郷地区夏祭り協力
	8 月	藤田・笹屋敷地区夏祭り協力 市民農園運営 ツーリズム実施 かあちゃんず定例会議 わらアート制作
	9 月	第 1 回市民農園交流企画実施 ツーリズムの実施 かあちゃんず役員会議 わらアートイベントの実施 六郷地区運動会協力
	10 月	第 2 回市民農園交流企画実施 ツーリズムの実施（年度内最後） かあちゃんず食の交流イベント 東六郷小学校 60 周年記念祭 わらアート展示

	11 月	市民農園運営 六郷市民祭りへの出店 やぎとのふれあい 七郷市民祭りへの出店 若林区の野菜おでん販売 かあちゃんず定例会議 わらアート展示終了
	12 月	市民農園運営 かあちゃんず　次年に向けた企画検討
2017 年	1 月	市民農園運営 次年度のツーリズム企画作成 六郷地区わたしのふるさとプロジェクト実施
	2 月	市民農園宣伝・広報開始 市民農園運営ツーリズム宣伝・広報開始 かあちゃんず役員会議
	3 月	市民農園運営 ツーリズム宣伝・広報 かあちゃんず定例会議

事業費とその内訳	・事業費総額 1,944,986 円 うち補助金額 1,724,000（国費 1,296,657　県費 427,343）自己負担額 220,986 ・人件費 1,425,000 円、旅費 36,600 円、消耗品費 206,700 円、通信運搬費 16,346 円、使用料及び会場賃料 147,180 円、募集広告費 113,160 円、計 1,944,986 円
	・話し合いのテーブルづくりに向けた女性の力を引き出す食プロジェクト～東六郷・東部かあちゃん‘ず…現地再建を果たした東六郷の農村で比較的地位が低く立場の狭い女性たちがかあちゃん’ずとして中心となって食を活かして地域を元気づける企画を実行した。被災地の農村で、どちらかと言えば細やかなところ、ソフト面にも敏感に目が配れる女性たちが中心となってイベントを行うことそのものがコミュニティの再生につながる。女性が積極的に動くことで子育てや介護への視点が加わり、集落の垣根を越えて子供達が集まり、被災地に活気がでた。企画そのものには約 200 名が参加し、六郷地域の住民にかあちゃん‘ずが浸透する契機となった。また、企画が成功したことで六郷地域の方々からかあちゃん’ずに対する期待感が生まれ、かあちゃん‘ずのメンバーからはこれからも企画をやっていきたいという声が上がっている。そのため、来年度からはかあちゃん’ずが自力で運営することを目標としている。 ・農村ツーリズム ①三本塚市民農園…8 月にバーベキュー、11 月に芋煮会、2 月に漬け物企画を実施した。これらの企画は地域の方々と共に作り上げることが出来た。地域の方々と共に企画を作っていくことで住民の主体性を引き出すことが出来た。また、企画を通して若林区の住民と外部の方々の交流を深められた。バーベキュー企画には市民農園の利用者三名が参加した。利用者同士の交流を図ると共に、参加者に若林区の現状を伝える

具体の成果	ことで参加者の意識を若林区に向ける一助となった。芋煮会は、8 月のバーベキュー企画で築かれた交流を維持、深める位置づけのもと開催された。利用者大人 4 名子供 3 名、地域の人も 2 名参加した。参加者と交流することで参加者と ReRoots の関係を築くことができた。また、若林区の野菜を野菜を振る舞うことで若林区の食の魅力を伝えることができた。漬け物企画には、利用者 6 名(うち子供 3 名)若林区外部の方 6 名(うち子供 2 名)地域の方 1 名が参加した。利用者と地域の人の交流や若林区に対する関心を伸ばすという位置づけはある程度は達成。地域住民は外部の人が若林区のどこに感動するかを知ることができ、外部の人は農家の話を直接聞けて、農業の魅力や若林区の魅力に気づくことが出来た。そのため、これらの企画で得られた成果はこれからの市民農園での企画に繋がる良い契機になった。 ②「いくっちゃ若林～田畑の復興ツーリズム～」ひまわりプロジェクト、おいもプロジェクト…のべ 100 人以上の方が参加した。ひまわりプロジェクトでは年間を通して種植えや防災キャンドルづくり、種収穫、ひまわりの種アートの作成を企画、おいもプロジェクトでは苗植えからつるかえし、収穫そして最後に芋煮にして消費することで農業体験をしながら食育も体験できる企画であった。これらの企画を行うことで若林区のファンを増やし、若林区への人の往来を活性化する契機となった。また、企画を運営するに当たって地域の方々と協力して企画を作っていくことで地域の方々にも積極的に人を若林区に招き入れようとする動きが高まっていった。 ③わらアート…仙台市農業園芸センターに五体のわらアートを展示した。特に子供達に大人気で展示期間中に約七万人が来場した。若林区、まちづくり協議会、農業園芸センターなどさまざまな協力のもと若林区外から若林区へ人を呼び込む重要な企画の一つになっていった。新しい若林区のイベントとして定着させ、将来的には豊作を祝う文化イベントとして若林区の恒例イベントのすることを目標としている。 ・被災地での文化再生～6 月ひがろくフェス、8 月夏祭り、9 月学区民運動会、1 月私のふるさとプロジェクト～…今年度の東六郷小学校の閉校により、再開したひがろくフェス、夏祭り、学区民運動会は 2016 年で最後となった。最後の企画ということもあり、地域の方々の愛着を感じられた。これからは地域行事がなくなるため、コミュニティの維持機能が失われるおそれがある。そのため、これからは住民の生活に根ざした身近な取り組みが求められる。
29 年度以降の活動計画	・話し合いのテーブルづくりによる形成した地域との関係に基づき、農業を基礎としてコミュニティ再生に取り組むことで、地域の緑野資源を引き出し、農村ツーリズムや販売、アートなど多様な要素へと連動、展開させていくことができる。そのため、今後も事業を継続しつつ住民が主体となって企画運営を行えるように促していく。そうすることで、住民自身が地元に自信を持ち、外へと発信し、地域づくりへと立ち上がっていく過程を引き出すことができる。 ・地域や住民の持っている素材、資源を生かすためには具体的なアイディア、政策として見える化することが求められる。食を通じたイベントやわらアート、販売などは具体化されているので、地元再発見へと繋がり、住民自身の地域おこしへと展開していく。 ・農業部門の活動を強化して ReRoots を若林区における一つのプレイヤーとして確立する。また、農村ツーリズムは NPO 部門として確立させる。 ・そのために、ReRoots は仙台の大学生（約 80 名　東北大・東北学院大・宮城大・宮城学院女子大・宮城教育大・白百合女子大）というグループという若さとアイディア

	を活かして、農家の立場に立って継続して地域の中に根付いた活動をしてきたことにより、地元の復興になくてはならない存在にもなってきている。ReRoots の存在自体、若者が若林区に訪れることそのものが復興のエネルギーになり、農村に対する若者の貢献であり、活力となる。そして、農村と農業に対する若者の関心を継続的に引き出すことへと繋がっていく。幸い、2015 年に 1 名新規就農者が生まれ、さらに 2016 年にも 2 名就農に至っている。ReRoots 自身が農業後継者養成として六郷地域の課題の解決に貢献している。今後も、農村と農業に対する若者の関心を引き出せるであろう。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　今回の取組により、住民の主体性を活かすことや、被災地に人の往来を生み出すことにより、住民の心のケアやコミュニティ形成等に貢献した点を評価する。今後の更なる取組の発展に期待する。

整理番号	（１）－１１
事業名	被災コミュニティの維持・形成と共助的見守り啓蒙・推進事業
事業実施主体と役割分担	・取組実施主体　『一般社団法人石巻じちれん』 ・協力団体（講座関係）石巻市地域包括ケア推進協議会、日本家政学会、 東北大学　課外・ボランティア活動支援センター （イベント）石巻市社会福祉協議会、ＮＰＯ法人Ｓｗｉｔｃｈ （定例会議）石巻仮設住宅自治連合推進会とその構成員（行政関係部課、 社協、警察署、消防署、一社）日本カーシェアリング協会、 公社）みらいサポート石巻） （情報共有）ＮＰＯ法人にじいろクレヨン、ＮＰＯ法人ベビースマイル
支援対象者の概要	１．仮設住宅住民：22 の加盟団地の自治組織役員をはじめ一般住民、ならびに非加盟団地住民（集会所でお茶会等で参加している人々） ２．復興公営住宅：新蛇田地区を主とした、団地会役員および一般住民
実施期間	平成２８年６月１６日　～　平成２９年３月３１日
事業内容とスケジュール	【６月】 ・22 日（水）08：30～13：00「味の素料理教室」実施 場所：仮設飯野川校団地、 参加者：住民 7 名、事務局 3 名、味の素（株）スタッフ ・23 日（木）08：30～13：00「味の素料理教室」実施 場所：仮設向陽団地 参加者：住民 8 名、事務局 1 名、味の素（株）スタッフ ・27 日（月）18：30～21：30　石巻仮設住宅自連合推進会　27 回理事会 場所：市営新蛇田第一集会所　理事 7、監事 1 出席 ・28 日（火）18：30～20：40　一社）石巻じちれん　第 1 回会員総会開催 場所：市営新蛇田第一集会所　会員：総数 8 名出席 ・30 日（木）18：30～21：00　石巻仮設住宅自連合推進会　第 5 回総会 場所：石巻専修大学　4104 教室、会員：総数 33 団地出席（含　委任出席 20） 来賓：菅原石巻市副市長、尾池専修大学学長 【７月】 ・3 日（日）18：30～20：20　新蛇田第一集会所・運営委員会　総会開催 （新蛇田地区復興公営住宅団地会のネットワーク形成支援） 場所：新蛇田第一集会所、出席：委員総数 14 名（出席 13、委任 1） ・見守り支援システム推進者養成講座 **『つながりサポーター養成講座』**と命名し、10 回シリーズで開催 講師：社会福祉士　末永亜衣、 受講者：事務局スタッフ 7 名ほか住民 1～2 名 1 回目：4 日（月）09：00～11：30　テーマ「コミュニケーションとは」 2 回目：7 日（木）09：00～11：30　テーマ「傾聴」 3 回目：11 日（月）09：00～11：00　テーマ「受容と共感・前編」

	4回目：14日（木）09：00～11：00　テーマ「地域共生・共同」 5回目：21日（木）09：00～11：20　テーマ「連携の技術」 6回目：25日（月）09：00～12：00　テーマ「連携の技術２」 7回目：28日（木）09：00～12：00　テーマ「連携の技術３」 ・10日（日）10：00～11：20　仮設団地・西支部会開催 場所：仮設糠塚団地、出席：4団地5名、事務局1名 ・11日（月）17：30～19：00　中央支部・北支部・東支部合同支部会開催 場所：南境第５団地、出席：9団地9名、事務局1名 ・14日（木）17：30～19：30　いしのまき支援連絡会　出席 場所：旧みなと荘　出席：社協3、NPO団体等21 ・17日（日）10：00～12：00　新蛇田第一集会所・運営委員会　役員会 場所：新蛇田第一集会所、出席：役員7名、事務局1名 【８月】 ・見守り支援システム推進者養成講座 **『つながりサポーター養成講座』**と命名し、10回シリーズで開催 講師：社会福祉士　末永亜衣、 受講者：事務局スタッフ7名ほか住民1～2名 8回目：1日（月）09：00～11：00　テーマ「各自の認識の発表」 9回目：4日（木）09：00～11：30　テーマ「孤立を無くす」 10回目：8日（月）09：00～12：00　テーマ「じちれんの潜在的能力」 ・9日（火）17：00～18：30　一社）石巻じちれん　理事会開催 場所：新蛇田第一集会所、理事3、事務局2 ・10日（水）17：30～19：50　いしのまき支援連絡会　出席 場所：旧みなと荘　出席：社協3、NPO団体等16 ・22日（月）「いしのまき自治連だより　V.31」発行 加盟仮設団地および希望する団地に配布・掲示 ・27日（土）10：00～12：00 熊本市の被災者3名来訪。仮設住宅に入居したあとの課題など当団体の発足の経緯や活動について聞き取りに来た。 【９月】 ・8日（木）17：30～19：00　いしのまき支援連絡会　出席 場所：旧みなと荘、　出席：社協4、NPO団体等8 ・11日（日）10：00～11：40　仮設団地・西支部会開催 場所：仮設糠塚団地、出席：6団地7名　事務局1名 ・11日（日）09：00～12：00　新蛇田第一集会所・運営委員会　役員会 場所：新蛇田第一集会所、出席：役員7名、事務局1名 ・12日（月）17：30～19：10　中央支部・北支部・東支部合同支部会開催 場所：南境第５団地、出席：9団地9名、事務局1名 ・12日（月）「運営委員会だより　9月号」発行 7つの各団地会に掲示 ・16日（金）18：30～20：20　石巻仮設住宅自治連合推進会　理事会開催

	場所：新蛇田第一集会所、 ・17 日（土）13：00～15：00　キャンナス熊本・代表山本女史来訪。 当団体の活動実績を聞きに来た。 ・24 日（土）14：00～18：00　石巻市 NPO 連絡会議 場所：みなと荘、出席：市役所各課 12、復興庁 3、NPO 団体等 33 ・29 日（木）18：30～20：30　一社）石巻じちれん　理事会開催 場所：新蛇田第一集会所、理事 4、監事 2、事務局 3 ・30 日（金）10：00～12：00　国立大学学生 12 名（東北大学、岩手大学、 熊本大学）来訪。当団体の発足経緯と活動内容についてプレゼンを行う。 【１０月】 ・9／30（金）「運営委員会だより　10 月号」発行 ・5 日（水）11：50～13：10　台湾教職員 20 名（防災教育海外訓練研修団）来石。 石巻の現状と当団体の活動を報告。 復興住宅と仮設住宅（南境第 5 団地）を見学してゆく ・9 日（日）10：00～　仮設団地・西支部会開催 場所：仮設糠塚団地、出席：2 団地 2 名　事務局 1 名 （次回より合同支部会に編入する方向で考えることとする。） ・13 日（木）17：30～19：50　第 30 回いしのまき支援連絡会出席 出席：社協 3、団体 19 ・16 日（日）10：00～12：00　見守り支援システム推進者養成講座 「認知症と向き合う＝地域編＝」 講師：石巻市包括ケアセンター所長　長　純一医師 参加：32 名 ・17 日（月）15：30～17：30　ドイツ高校生 17 名受け入れ、石巻の現状と 当団体の活動報告 ・17 日（月）17：30～　中央支部・北支部・東支部合同支部会開催 場所：南境第５団地、出席：9 団地 9 名、事務局 1 名 ・21 日（金）11：00～12：30　熊本県健康福祉政策課　主任主事石田知穂氏　来訪。 当団体活動について情報提供 ・23 日（日）13：30～15：30　見守り支援システム推進者養成講座 「居住環境の問題解決と生活復興」 講師：大阪市立大学　学長補佐　宮野道雄　工学博士 参加：36 名 ・30 日（日）10：00～11：00　新立野第一集会所・運営委員会開催 出席：7 名、事務局 1 ・31 日（月）「いしのまき自治連だより　Vol.32」発行 ・31 日（月）「運営委員会だより　11 月号」発行 【１１月】 ・10 日（木）17：30～19：30　第 31 回いしのまき支援連絡会出席 出席：社協 4、団体 10 ・12 日（土）15：00～16：30　川崎市住民 11 名来訪

	震災後の仮設住宅、復興住宅の状況説明と当法人の活動を披露 ・13 日（日）10：00～12：00　見守り支援システム推進者養成講座 「認知症と向き合う＝家族編＝」 講師：石巻市包括ケアセンター保健師・髙橋惠子氏、熊谷悦子氏 参加：21 名 ・20 日（日）09：00～12：00　国際医学生連盟（日本支部）の医学生 20 名を仮設大森第 4 団地に紹介・コーディネート 学生 20 名、住民 10 名 【１２月】 ・1 日（木）「運営委員会だより　12 月の催し」発行 ・4 日（日）10：00～12：30　仮設団地・支部会（合同）開催 場所：南境第５団地　集会所 出席：14 団地 14 名、事務局 1、NHK 仙台記者（見学） ・8 日（木）17：30～19：00　第 32 回いしのまき支援連絡会出席 出席：社協 4、団体 9 ・11 日（日）10：00～12：00　見守り支援システム推進者養成講座 「認知症と向き合う＝個人編＝」 講師：東北医科薬科大学　古川　勝敏教授 参加：36 名 ・20 日（火）18：30～21：30　一社）石巻じちれん　第 3 回理事会開催 場所：市営新蛇田第一集会所 出席：理事 5、監事 2、事務局 3 ・21 日（水）18：30～21：00　仮設住宅自治連合推進会　役員意見交換会および理事会開催 場所：市営新蛇田第一集会所 出席：理事 4、監事 1、顧問 4、名誉会長 2、事務局 4 【２９年１月】 ・6 日（金）「いしのまき自治連だより　Vol.33」発行 ・12 日（木）18：00～20：00　第 33 回いしのまき支援連絡会出席 出席：社協 4、団体 10 ・17 日（火）13：00～14：30　県共同参画社会推進課による現地調査 9 月末までの活動報告（会長増田、事務長内海、会計阿部由対応） ・17 日（火）「運営委員会だより　1 月、2 月の催し」発行 ・21 日（土）14：00～17：00　第 4 回石巻市 NPO 連絡会議　出席 場所：みなと荘 出席：約 30 名 ・22 日（日）10：00～12：00　第 2 回合同支部会　開催 場所：南境第 5 団地　集会所 出席：20 団地 21 名、事務局　4 名 ・27 日（金）10：00～12：00「認知症サポーター養成講座」開催 場所：市営新蛇田第一集会所

	講師：石巻市蛇田地域包括支援センター職員７名 参加者：22 名 ・31 日（火）14：00～16：00　拠点団地お茶っこ交流会　開催 場所：仮設大橋団地 参加者：住民 22 名、事務局３名、ボランティア OB　４名 【２月】 ・3 日（金）10：00～12：00　第１回「つながりサポーターパル」発足 場所：市営新蛇田第一集会所 出席：10 名 1／27 開催の「認知症サポーター養成講座」に参加した 22 名に声がけし、 有志が集まり、今後の活動について打合せた。 ・7 日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第４団地 参加者：住民５名、事務局３名、ボランティア OB　１名 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民 19 名、事務局３名、ボランティア OB　２名 ・7 日（火）10：00～12：00　拠点団地お茶っこ交流会　開催 ・10 日（金）10：00～12：00　第２回「つながりサポーターパル」開催 場所：市営新蛇田第一集会所 出席：６名＋新メンバー1 名 ・12 日（日）10：00～12：00　仮設団地・合同支部会　開催 場所：大橋団地　東集会所 出席：11 団地 11 名、　事務局１ ・14 日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第４団地 参加者：住民４名、事務局２名、ボランティア OB　１名 他支援団体４名、 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民 17 名、事務局２名、ボランティア OB　２名 他支援団体２名、 ・16 日（木）13：30～15：30　いしのまき支援連絡会／ボランティア・NPO 活動交流会　出席 場所：旧みなと荘 出席：社協９名、30 団体 52 名 ・21 日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第４団地 参加者：住民３名、事務局２名、ボランティア OB　２名

	他支援団体４名、 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民19名、事務局２名、ボランティアOB　３名 他支援団体２名、 ・24日（金）10：00～12：00　第３回「つながりサポーターパル」開催 場所：市営新蛇田第一集会所 出席：６名　事務局２名、社協１名 ・27日（月）18：30～20：00　石巻仮設住宅自治連合推進会　役員意見交換会＋理事会　開催 場所：新蛇田第一集会所 出席：理事４、監事２、顧問５、名誉会長１、事務局３ ・28日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎08：30～17：00（出張お茶っこ交流会＝鳴子温泉日帰り旅行） 場所：仮設南境第４団地 参加者：住民４名、事務局２名、他支援団体１名 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民23名、事務局１名、ボランティアOB　３名 ・28日（火）18：30～21：30　一社）石巻じちれん　理事会開催 場所：新蛇田第一集会所 出席：理事５、監事２、事務局３ 【３月】 ・３日（金）「運営委員会だより　３月号」発行予定 ・６日（月）「いしのまき自治連だより　Vol.34」発行 ・７日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第４団地 参加者：住民３名、事務局２名、ボランティアOB　２名 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民22名、事務局２名、ボランティアOB　３名 ・９日（木）17：30～20：00　第34回いしのまき支援連絡会　出席 場所：旧みなと荘 出席：社協３名、団体６名、復興庁石巻支局１名／計10名 ・10日（金）10：00～12：00　第４回「つながりサポーターパル」開催 場所：新蛇田第一集会所 参加者：８名、事務局１名 ・12日（日）10：00～12：00　仮設団地・合同支部会　開催 場所：大橋団地　東集会所 出席：14団地　14名、　事務局１

	・14日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第4団地 参加者：住民3名、事務局2名、ボランティアOB　2名 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民23名、事務局2名、ボランティアOB　3名、 他支援団体1名 ・17日（金）10：00～12：00　「傾聴セミナー」開催 場所：市営新蛇田第二集会所 講師：認定NPO法人　Switch　代表理事　髙橋　由佳 参加者：6名（「パル」のメンバー）、事務局1名 ・21日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第4団地 参加者：住民5名、事務局2名、ボランティアOB　1名、 他支援団体1名、 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地 参加者：住民15名、事務局2名、ボランティアOB　3名 ・28日（火）拠点団地お茶っこ交流会　開催予定 ◎10：00～12：00 場所：仮設南境第4団地 参加者：住民4名、事務局1名、ボランティアOB　2名、 他支援団体1名 ◎14：00～16：00 場所：仮設大橋団地→秋保温泉 参加者：住民21名、事務局2名、他支援団体3名 ・29日（水）10：00～12：20「認知症の概略と地域での互助活動について」開催 場所：市営新蛇田第一集会所 講師：石巻市包括ケアセンター　所長　長純一　医師 参加者：14名（「パル」のメンバーを中心とする）、事務局2名
事業費とその内訳	**事業費総額　・・・・・・・・・・・・・・・・6,476,701（円）** 【内訳】 1　人件費　4,700,173（円） 2　諸謝金　230,000 3　旅費　50,640 4　消耗品費　470,225 5　印刷製本費　195,714 6　通信運搬費　32,406

	7　市湯量及び会場賃料　124,071 8　委託費　673,472 ＊当該補助金　5,626,000 （国）4,317,800 （県）1,308,200 ＊自己負担　850,701
	Ⅰ．仮設団地自治会・世話人会の維持および外部アクターとのネットワーク維持支援： ●直接的効果 ・仮設自治会等意見交換会の定期開催等により、仮設コミュニティの状況把握とキーパーソンによる情報共有が図られ、仮設集約と最終的な解消へ向けての課題が住民の孤立緩和である点が最大の課題であることが関係者間に共有・明確化した。 ・仮設の空洞化が進む中、従来の自治会・世話人会役員が退去し、住民組織の維持は難しくなっているが、従来の役員間のネットワークを生かし、新たな世話役的存在の掘り起こしにつながっている。 ●波及効果 ・仮設解消までの住民の孤立緩和を最大の課題として、これへの対応策（集約先１７団地でのお茶会の週１回定期開催）が具体化しつつある。また、当団体の他、仮設自治会役員ＯＢやいしのまき支援連絡会参加団体からも協力の申し出を受けている。

具体の成果	Ⅱ．復興公営住宅団地会（主に新蛇田地区）のネットワーク形成支援： ●直接的効果 ・運営委員会を全団地会役員及び各団地所属住民代表により構成することにより、本来の住民組織形成まで暫定的ではあるが、住民連絡会機能を有する組織が形成されることとなった。 ●波及効果 ・委員会を開催することにより、各団地会役員や住民同士が顔なじみとなり、日常のインフォーマルな情報共有が図られるとともに、彼らを中心とした団地会合同によるイベント（盆踊り大会等：本助成外で実施）の開催等、地区全体の一体感形成に効果があった。 ・本年度は実際の集会所運営に関して当会が協力しつつ行なったが、運営委員会委員それぞれが参画意識を持ち、住民による自律的運営への機運が高まりつつある。 Ⅲ．被災コミュニティのネットワークを活かした住民相互の共助的見守り支援システムの形成： ●直接的効果 ・復興公営住宅住民によるサークルである「つながりサポーター『パル』」が発足、住民自身がコミュニティの課題として見守りの必要性を認識し、自律的に共助的環境形成に立ち上がった。 ・当会の組織内部ではなく、住民自身による自主的サークルとして住民同士の見守りサポーター団体が形成できたことで、当会は同様のサークル形成のシーズづくりと運営サポートを行い、活動主体は住民自身のサークルというスタイルが形成できた。 ●波及効果 ・上記のスタイルをモデルとし、サークル形成と運営のノウハウを生かし、仮設住宅および復興公営住宅への波及が見込まれる。
29年度以降の活動計画	１．仮設団地集約に伴う住民コミュニティ維持サポート： 平成28年6月に石巻市の「被災者自立再建促進プログラム」が発表され、現在の132仮設団地を22の拠点団地に集約することが決まった。当該拠点団地では、旧来の住民と新規住民が混在し、比較的自立力の弱い入居者が相対的に多数を占めることが予想される。同時に、自治会役員等キーパーソンの多くが退去するため、自治会を中心としたコミュニティは弱体化する。そこで、これまで培った仮設住民、関係団体とのネットワークを生かして、既存住民と新規住民との融和を図り、住民の孤立緩和を図るべく、22の拠点団地のうち17団地（コミュニティの強固な半島地区の5団地を除く）で週一回の定期お茶会を開催し、新・旧住民に交流の場を提供する。 ２．共助的見守り支援： 仮設住宅住民に先立って、新蛇田地区の復興公営住宅住民がコミュニティの課題として見守りの必要性を深く認識し、住民サークル「つながりサポーター『パル』」を結成した。次年度はこのサークル形成支援のノウハウを生かし、見守り活動の拡大を促してゆく。

評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　多くの他団体との連携、関係者間での情報共有が図られている。復興公営住宅の住民同士が見守りサポーター団体を立ち上がる等、自律的な共助的環境形成に貢献した点を評価する。

整理番号	（１）―１２
事業名	コミュニティ 2.0 ~次の５年に向けた創造的協働の創出
事業実施主体と役割分担	・一般社団法人 ISHINOMAKI2.0 事業実施主体（事業企画及び実施・進行管理・会計管理など） ・NPO 法人 都市デザインワークス カンファンレンスにて被災地区のコミュニティづくりの知見を共有。 ・一般社団法人 日本カーシェアリング協会 イベントにて復興公営住宅住民のコミュニティづくりサポート。カンファレンスにて知見を交換。 ・株式会社まちづくりまんぼう 中央一まりびらきイベント（出張カフェ)にて協働。 ・一般社団法人 石巻じちれん カンファレンスにて地域コミュニティづくりの知見交換および情報共有。 ・NPO 法人にじいろくれよん カンファレンスにて地域コミュニティづくりの知見交換および情報共有。 ・UR 都市再生機構 復興公営住宅の共同設備に対しての知見共有。まちびらきイベントにて協働。 ・石巻市社会福祉協議会 カンファレンスにて地域コミュニティづくりの知見交換および情報共有。 ・大和ハウス 復興公営住宅の共同設備に対しての知見共有。カンファレンスにて知見交換 ・ぱんぷきん株式会社 湊地区復興公営住宅周辺について意見交換。
支援対象者の概要	・　復興公営住宅の住民およびその立地する近隣住民。 ・　復興公営住宅を支援する民間の事業者
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日から平成 29 年 3 月 31 日まで
事業内容とスケジュール	【事業内容】 〈①豊かで創造的な新コミュニティのモデルづくり支援の実践〉（事業内容イ） 石巻市中央部の災害公営住宅（を対象に、以下の事業を行った。） ・実験的まちづくりイベント STAND UP WEEK における、野外上映会、一箱古本市、ワークショップの開催などを通じて、災害公営住宅入居者同士や周辺既存住民との交流を図り、地域の見方や使い方についての視点を養う（7/23～8/1） ・集会場を利用した出張 IRORI+café の開催 まちびらきイベントの際に災害公営住宅の集会場などを利用して、出張カフェやワークショップなどの参加型イベントを実施する。(6 月以降随時） ・いしのまき学校（高校生を主体としたフィールドスタディプログラム）を通じた、若い主体との交流

	〈②多様なコミュニティづくりの在り方の調査および情報発信〉 石巻中央部にとどまらず、各地区におけるコミュニティづくりの取り組みを調査・収集し、そうした取り組みをかわら版として草の根的に情報発信するとともに、拠点施設IRORIに情報を集約し､住民や支援者がそれらの情報にアクセスできるようにする。また、住民、支援団体、学識経験者などによるコミュニティづくりの在り方をテーマにした発表・意見交換の場＝カンファレンスを開催する。 【スケジュール】 ６月 スタッフ募集、事務局体制整備、コミュニティづくりリサーチ開始 ７月　STAND UP WEEK(7/23～8/1) 一箱古本市(参加者約500名)野外上映会(参加者600名)七夕づくりワークショップ(参加者600名)いしのまき学校企画(参加者100名) ８月　カンファレンス準備 ９月　まちづくりカンファレンス①「名取市仙台荒井の事例/都市デザインワークス」 町内会ヒアリング(門脇)（ヒアリング：かどのわき町内会、UR都市再生機構) 10月　町内会ヒアリング(門脇/かどのわき町内会、立町/立町再開発組合、湊/石巻市湊地区福祉団体協議会、社会福祉協議会、大和ハウス) いしのまき学校高校生企画／出張IRORIカフェ開催(中央一大通りまちびらきイベント)(カフェ利用者110名) 情報誌「住み開きのテビキvol.1/中央・立町編」発行 11月　まちづくりカンファレンス②「みなとミーティング(湊東地区情報交換会)」 情報誌「住み開きのテビキvol.1/門脇編」発行 12月　まちびらきのテビキ取材(門脇：青池監督、かどのわき町内会) かどのわき町内会活動に参加。 １月　情報誌「住み開きのテビキvol.2/中央・立町編」発行 ２月　情報誌「住み開きのテビキvol.2/門脇編」発行 ３月　出張IRORIカフェ開催(門脇まちびらきイベント) 情報誌「住み開きのテビキvol.3/中央・立町編」 まちづくりカンファレンス③「復興公営住宅の今後の支援にむけて」
事業費とその内訳	・　事業費の総額 6,471,115 円 うち補助金額5,824,000（国費4,314,076　県費1,509,924）自己負担額647,115 ・　その内訳（人件費4,717,000 円、諸謝金20,000円、旅費567,344 円、消耗品費168,068 円、印刷製本費398,703 円、委託費等600,000円）
	【課題・事業の必要性】 東日本大震災の震源地に最も近い自治体石巻市において、発災から5年が経過した現在、仮設住宅から災害公営住宅への移転の作業が進んでいるが、それは避難所、仮設住宅への移転に続き、被災者がみたびコミュニティを再構築することを求められる状況をもたらしている。見ず知らずの方々で新たに自治会役員や集会場などの管理方法といった基本的な事項を決めなければならないのみならず、既存の周辺町内会などとの融和など為すべき事柄は多い。その際、福祉的視点にとどまった支援だけでは、持続的、自律的なコミュニティを形成するには足りず、災害公営住宅の住民が真に安心で豊かな暮らしを送るためには、文化的コンテンツやレクリエーション、多様な交流の機会、買い物環境の充実など、新環境の「暮らしの質」を高め

具体の成果	る視点を持たなければならない。上記の視点からコミュニティづくりを行うに際しては、行政、災害公営住宅入居者、既存町内会といった主体だけでなく、支援活動を行うNPO、発信力・行動力のある新移住者、企業、大学など、震災を契機に様々な活動を行っている多様な主体の活動に光を当て、巻き込む必要がある。 【事業成果（効果)】 　復興公営住宅においてコミュニティ形成の場を実施するほか、計来場者500人を目標とする野外上映会・一箱古本市の各イベントや、高校生によるプログラムなどを通じて、石巻中央部や湊東、門脇地区に災害公営住宅コミュニティのモデルを形成した。 　各地区のコミュニティづくりの情報をリサーチし、情報発信としてかわらばん(住み開きのテビキ)を石巻立町/中央地区と石巻門脇/中央地区の両地区にて合計5号 合計3,000部発行した。復興公営住宅に対するコミュニティづくりのきっかけや住民の生活に対して便利な情報を提供した。具体的に復興公営住宅に住む人たちが地域社会や町内の一員として新たに住み始めるのにあたり、これまでの町内活動を深く理解する情報を掲載したり、地域の地図を中心に利便的な情報を掲載し、新たに住み始める地域にとけ込むための一助となった。 また直接配布をすることで住民のヒアリングを同時におこない、地域のニーズを発掘した。 　各地区でのコミュニティづくりのリサーチにおいては、リサーチを通じて各地区で草の根的に取り組んでいる主体や支援団体と対話し、取り組み成果の発表の機会を設けることで、そうした取り組み主体のやる気を高め、各地域の力を高めることができた。
29年度以降の活動計画	石巻市が政策として進めている地域自治システム事業や地域包括ケア事業と連携し、災害復興マターとしてのコミュニティづくりターム以降も、より豊かで主体的・持続的なコミュニティづくりが進められるようにする。 　チームビルディングを通じて新たなソーシャルビジネスが起こることを目指し、自立した主体を生み出す。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　復興公営住宅のサポートする民間団体のネットワークが形成されている。多方面からの取組により、コミュニティ形成を図った点を評価する。行政や他団体との連携の中で、より豊かで主体的・持続的なコミュニティづくりに繋がるよう期待する。

整理番号	（１）－１３
事業名	山元町における地域コミュニティ・支え合い活動推進事業
事業実施主体と役割分担	事業実施主体：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター （本事業の企画・運営管理全般） 協力団体　　：山元町地域包括支援センター（行政直営方式） 社会福祉法人山元町社会福祉協議会 （本事業の実施・運営を協働）
支援対象者の概要	①山元町地域包括支援センター・社会福祉協議会職員（山元町における地域コミュニティ形成に関わる専門職や支援者） ②山元町の行政区長、自治会長など住民リーダー、および地域住民
実施期間	平成 28 年 6 月 16 日～平成 29 年 3 月 31 日
事業内容とスケジュール	【事業の概要とスケジュール】 １）実行委員会 本事業の実施にかかる企画調整・検討を行うため実行委員会を設置した。 ・事業の方向性の協議、検討 ・地域活動の発見の仕方の勉強会の企画・運営 ・地域の宝物発表会の企画・運営 ・実践事例ガイドブック及び映像ＤＶＤについての企画 ＜委員＞ NO　所属　職名　氏名 1　社会福祉法人山元町社会福祉協議会　事務局長　菊池　吉弘 2　〃　主事　川辺　琴路 3　山元町役場　被災者支援室　室長　渡邊　隆弘 4　山元町役場　被災者支援室　被災者支援班班長　伊藤　千春 5　山元町役場　保健福祉課　課長　桔梗　俊幸 6　山元町役場　保健福祉課　福祉班班長　青田　敦子 7　山元町役場　保健福祉課　保険給付班班長　菊地　幹真 8　地域包括支援センター　所長　只野　里子 9　地域包括支援センター　高齢者相談支援班班長　高橋　千代子 10　〃　保健師　清田　史 11　〃　介護支援専門員　長田　みゆき 12　〃　作業療法士　武田　綾子 13　委員長　東北福祉大学　総合マネジメント学部　教授　高橋　誠一 14　ご近所福祉クリエイション　主宰　酒井　保 15　特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長　池田　昌弘 事務局　全国コミュニティライフサポートセンター　主査　橋本 泰典

第１回／平成 28 年 8 月 29 日（月）10:00～12:00　山元町役場第１会議室
（委員 15 人・事務局２人）
・事業概要説明、事業企画、実施に関する意見交換
第２回／平成 29 年 1 月 18 日（水）16:00～17:30　山元町役場第３会議室
（委員 14 人・事務局２人）
・地域ふれあい支え合い研修会（第１回、第２回）実施状況報告
・地域ふれあい支え合い活動発表会の企画検討

２）作業部会
実行委員会委員、および事務局から招集し、事業実施に必要な協議検討、各種調整、準備などを行った。
第１回／平成 28 年 10 月 28 日（金）14:30～17:00　山元町役場第３会議室
（委員６人・事務局２人）
・第１回研修会の振り返り
・第２回研修会の持ち方、発表会の企画案について
第２回／平成 28 年 11 月 25 日（金）10:00～12:00　山元町役場第３会議室
（委員４人・町社協職員５人）
・地域ふれあい支え合い研修会（第２回）において、グループワークの進行を補佐すること、および第１回研修を受講できなかった社会福祉協議会などの職員が、“宝物探し”の視点を理解するための勉強会を開催した。
その他（事務局担当者打ち合わせ）・7/19、8/23、9/30、10/3

３）地域への入り方・地域活動の見つけ方勉強会
「地域ふれあい・支え合い研修会」の開催
地域コミュニティづくりに関係する山元町行政職員や福祉専門職と、地域住民を対象とし、日常的に行われている住民の支え合い（地域の宝物）の見つけ方、その広げ方（見える化・見せる化）の勉強会を開催した。
第１回／①平成 28 年 10 月４日（火）09:30～11:30　山元町中央公民館会議室
鷲足・山寺・浅生原・高瀬・合戦原地区対象
②平成 28 年 10 月４日（火）13:30～15:30　山元町中央公民館会議室
つばめの杜西、同東・笠野・花釜・牛橋・山下地区対象
③平成 28 年 10 月５日（水）09:30～11:30　山元町坂元公民館会議室
真庭・久保間・中山・下郷・町・上平・磯・中浜地区対象
④平成 28 年 10 月５日（水）13:30～15:30　山元町大平生活センター
八手庭・横山・大平・小平地区対象
２日間４回実施　参加者合計 71 人

＜構成・講師など＞
第１部：講演「地域ふれあい・支え合い
地域のお宝探し　７つのポイント」
講師：ご近所福祉クリエイション主宰
ご近所福祉クリエーター　　酒井　保氏

活動事例紹介「お茶飲み場へ行こう！
～サロンと呼ばれないサロンの物語～」
解説：全国コミュニティライフサポートセンター
企画広報・書籍販売グループ 主査 木村 利浩
第２部：演習「自分の地域の“お宝”を見つけよう」
第１部の講演をもとに、地区ごとに編成されたグルー王で、
自分の地域や日常生活のなかにある支え合い（宝物）を書き出し、
模造紙に貼り出す作業

第２回／①平成 28 年 12 月 5 日（水）09:30～11:30　山元町中央公民館会議室
鷲足・山寺・浅生原・高瀬・合戦原、真庭・久保間・中山・下郷
・町・上平・磯・中浜地区対象
②平成 28 年 10 月 4 日（火）13:30～15:30　山元町中央公民館会議室
つばめの杜西、同東・笠野・花釜・牛橋・山下・　八手庭・横山
・大平・小平地区対象

2 回実施　参加者合計 61 人

＜構成・講師など＞
講師：ご近所福祉クリエイション主宰
ご近所福祉クリエーター　酒井　保氏

・１回目の振り返りを兼ねて、新たに参加した受講者のために“宝物”のとらえ方を説明。
・１回目に受講者が書き出した、自分たちの地域の「宝物」から支え合いガイドブックに掲載したい事例を１つ選び、その意義を考えたり、概要がわかる見出し付けをグループで行う。
・グループワークを支援するため、地域包括支援センター、社会福祉協議会が進行補佐役として参加。

３）「地域ふれあい・支え合い活動発表会」の開催
「地域ふれあい支え合い研修会」で町内 23 地区の住民が、地域の支え合いを明らかにし、そのうち１事例を「活動自慢」として掲載した山元町支え合いガイドブックのお披露目と、地区の支え合いの取り組みを、広く町民や行政、専門職などと共有し、こうした取り組みをさらに発展させていくことを目的として、活動発表会を開催した。

実施日時：平成 29 年 2 月 15 日（水）13:30～15:30
山元町中央公民館大ホール
参加者　：行政区長・自治会長、民生委員、一般町民、行政、社会福祉協議会等関係機関や団体職員、地元災害ＦＭなど報道機関　約 150 人

＜構成・講師など＞

開会挨拶：嘉藤敏雄副町長

ミニ講演：「支え合いは、地域のお宝」

講師：ご近所福祉クリエイション主宰

ご近所福祉クリエーター　酒井　保　氏

山元町住民支え合いガイドブックのお披露目

ナレーションとインタビュー形式による活動紹介・パネルディスカッション

◆紹介団体・パネラー

つばめの杜東地区　なかよし会

山下地区　やました花いっぱい

牛橋地区　6 団体の交流

坂元地区　山元健康麻雀愛好会

◆インタビューアー

ご近所福祉クリエイション主宰

ご近所福祉クリエーター　酒井　保　氏

◆コメンテーター

全国コミュニティライフサポートセンター

理事長　池田　昌弘

◆コーディネーター

東北福祉大学総合マネジメント学部

（山元町における地域コミュニティ・支え合い活動推進事業実行委員会委員長）教授　高橋　誠一　氏

４）実践活動の取り組み事例集（ガイドブック）と映像ＤＶＤの作成

日常的に行われている住民の自然な支え合いを探し、「見える化」する一環として、３）「地域ふれあい・支え合い活動発表会」の開催に合わせて、「山元町民支え合いガイドブック」1,000 部を作成し、発表会に来場した町民、関係者など 150 人と、宮城県内の各市町村及び市町村社会福祉協議会、各都道府県及び都道府県社会福祉協議会に送付した。

日常的に行われている住民の自然な支え合いに着目し、それを探して見える化し、より多くの住民や関係者と共有していく展開の手順を解説したＤＶＤ500 枚を作成し、改正介護保険法における「新しい総合事業」や「生活支援体制整備」に取り組む自治体や専門職などの参考になるよう、市町村社会福祉協議会等に配付した。

また、ガイドブックとＤＶＤは、当法人ホームページにアップロードし、広く地域コミュニティ支援に携わる人・団体への参考に供した。

事業費とその内訳	区　　分	精　算　額	摘　　要
	人件費	3,283,200	7～3月分 資料整理、研修準備
	諸謝金	141,000	委員会2回･研修会2回･活動発表会 延6人
	旅費	129,177	研修講師､ｶﾞｿﾘﾝ､通行料､駐車料
	消耗品費	0	
	印刷製本費	306,750	ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸ 1,000部、報告会資料150部
	通信運搬費	0	
	使用料及び会場賃料	0	
	委託費	2,696,000	ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸﾃﾞｻﾞｲﾝ編集､DVD作成､HP情報管理
	その他（雑役務費）	5,260	
	合　　計	6,561,387	内補助金額5,905,000（国費4,374,258　県費1,530,742） 自己負担額　656,387

具体の成果

【事業目的・課題・背景】

現在、被災地では、仮設住宅から復興住宅や防災集団移転用地などへの転居が進み、恒常的な地域生活の再建や地域コミュニティ形成が必須課題である。

しかし、被災地は人口減少や高齢化などにより、地域力が脆弱化したなかでのコミュニティの再建が求められたり、高台移転の造成地などで、馴染みのない住民同士が新たなコミュニティづくりに取り組んだりするケースも少なくない。

これらの取り組みには、行政等による施策や専門職などによる支援もさることながら、住民の日常生活のなかで生まれた活動や、震災前から地域で行われてきた行事などが、支え合いとして意識されているかどうかに関わらず、コミュニティの形成・維持に大きな影響を与える。

このような活動をいかに継続し、波及させていくか。そのために、行政やコミュニティ形成支援に関わる専門職は、地域のなかの営みを発掘し、応援する視点を持つことが肝要であり、埋もれがちな住民の支え合いを「見える化」することが極めて重要な鍵であると考える。

【事業成果（効果）】

＜直接効果＞

・復興がすすむ山元町の被災地区や内陸側の災害公営住宅などで、コミュニティづくりに大切な役割を果している地域住民や支え合いを発見し、見える化の作業と評価により、活動への自信と活動継続へのモチベーションを提供することができた。

・本事業で作成した「山元町民支え合いガイドブック」を町が増刷し、全戸配付を行った。町は平成 29 年度も支え合い活動発表会を継続的に開催する意向で、予算化を進めており、本事業を通して町民への啓発を進める一助となった。

・日ごろ、住民の抱える困りごとや課題など対し、指導・助言的な立場で接することが多い行政や専門職が、地域に入る（住民の日常生活に関わる）ことの意味や方法、地域活動を評価する視点を持つことができた。また、その視点を、町直営の地域包括支援センターをはじめ、介護保険担当、地域福祉担当、被災者支援担当など行政の複数の部門や、社会福祉協議会などと共有することができた。

具体の成果	＜波及効果＞ ・地域で日常的に行われているご近所との自然なつながり（たとえば、お茶飲みなど）は、お互いに気にかけあったり、見守ったり、支え合ったりというきっかけになっており、地域コミュニティの基盤となっていることを、行政などの関係者も住民も共有したこと。
29 年度以降の活動計画	①山元町地域包括支援センターからは、息の長い継続的な支援を要請されており、町が企画する次年度事業に、講師派遣を含めて応えていく予定である。 ②現在、当法人が宮城県サポートセンター支援事務所（宮城県による設置）との協働で実施している研修において、今回の事業で会得したノウハウを生かした研修を企画している。 ③また、改正介護保険等により各自治体に生活支援コーディネーターや協議体の設置が義務付けられ、これまで以上に地域住民・活動との連携が、市町村や地域包括支援センターに求められている。住民が自らの力に気づき、制度やサービスだけに頼らず、日常の営みのなかで支え合い、暮らしを豊かなものにしていく取り組みを他市町村に広げていくために、本事業で制作したＤＶＤやノウハウを活用する。 被災地などの地域支援について、各種の情報発信とともに、各種勉強会やセミナーの開催、事業の協働など、継続的に行っていく予定である。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 行政やコミュニティ形成支援に関わる専門職を巻き込み、住民の支え合いの活動を「見える化」することで、恒常的な地域生活の再建や地域コミュニティ形成の基礎となる体制を構築した点を評価する。

整理番号	（１）－１４
事業名	被災地・地域活動団体ガイドブック作成事業
事業実施主体と役割分担	事業実施団体：特定非営利活動法人地星社 学習会協力団体： 特定非営利活動法人いしのまきNPOセンター（石巻市との連絡調整、広報、当日スタッフ） 特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク（当日スタッフ） おらほの自治を考える会（当日スタッフ）
支援対象者の概要	◯ガイドブック作成 掲載対象：宮城県内被災地の地域活動団体（NPO、地域団体等） 配布対象：情報掲載団体、行政機関、企業、社会福祉協議会、地域包括支援センター、助成機関、市民活動支援施設等 ◯地域づくり学習会 NPO、住民自治組織、行政職員、社協職員等
実施期間	平成28年6月16日から平成29年3月31日まで
事業内容とスケジュール	◯事業概要 復興支援・被災者支援にかかわる地域の諸主体の連携の促進と、住民主体の地域づくりへの意識づけのために、被災地における地域活動団体に活動紹介アンケートを送付し、回収したアンケートを元に団体紹介のガイドブックの作成と配布を行った。また、住民主体の地域づくりに関する学習会と事業報告会を実施した。 ◯スケジュール 6月　ガイドブックの企画案作成 7月　県域の中間支援団体・期間等を訪問し、地域活動団体の情報収集 8月　小規模多機能自治講座に協力団体として参加 9月　団体の情報収集、アルバイト雇用の準備 10月　団体の情報収集、アルバイトの雇用開始、事例の取材（2件） 11月　アンケート送付準備、事例の取材（2件） 12月　アンケートの送付、原稿デザイン作成、取材記事作成 1月　アンケートの呼びかけ・回収、地域づくり学習会①（参加者51名） 2月　アンケートの呼びかけ・回収、原稿整理、原稿作成 3月　地域づくり学習会②（参加者24名）、原稿作成・校正、ガイドブックの印刷（250団体掲載）・発送、事業報告会
事業費とその内訳	事業費総額：3,016,229円 うち補助金額（国費2,010,819　県費703,181）自己負担額302,229 内訳（人件費1,298,816円、諸謝金388,028円、旅費63,614円、 消耗品費152,005円、印刷製本費801,360円、通信運搬費290,644円、 使用料及び会場借料12,410円、募集広告費9,352円）

具体の成果	◯背景・課題・目的 　住まいの復興の本格化により、被災者に対し行政やNPOが支援する段階から、被災者を含めた地域全体で地域の課題解決力を高めていくという段階に移りつつある。そこで、地域の課題解決力強化には地域住民、自治体、NPO等が課題を共有しながら連携を深めることが重要となる。しかし、連携を進める上で、地域においてどのような団体が活動しているのか、全体像が把握されていないという課題があった。そこで、地域で活動している団体を一覧できるようにすることを目的とし、今回の事業を実施した。 ◯直接的効果（アウトプット） 　宮城県内被災地で活動する250団体の情報と、県内や隣県で行われている住民主体の地域づくりをしている4事例を掲載したガイドブックを1000部作成した。作成したガイドブックは、こうした情報を必要とする行政機関や社会福祉協議会、市民活動支援施設、助成機関、企業のCSR担当、マスコミ等に配布した。ガイドブックの完成により、被災地の主だった地域活動団体の情報を一覧できるようになり、関係機関の連携を取りやすくなった。 　また、住民主体の地域づくりの手法である小規模多機能自治の学習会を石巻と岩沼で開催し、NPOや住民自治組織、行政職員など合わせて75名の参加があった。学習会では、先進事例や地域のデータを地域づくりに活かす手法を学び、次のステップとしてどのような活動が必要かを伝えることができた。 ◯波及的効果（アウトカム） 　平成28年度は、ガイドブックに関しては情報を冊子にまとめるところまでが目標で、冊子も完成したばかりであることから、波及的効果と呼べるものはまだない。これからの取り組みになってくる。 　学習会に関しては、参加者が学習会で学んだデータ分析手法を実際に使ってみたり、自分たちで学習会を開催するなど広がりを見せている。また、学習会がきっかけとなり、岩沼市のコミュニティ支援について当団体もかかわることになった。 ◯その他、事業によって得られた成果 　ガイドブックについて取材を受け、河北新報（4月7日夕刊）に掲載された。また、NHKラジオ第一放送の番組「ゴジだっちゃ！」にも出演の機会を得て、ガイドブックについて紹介させていただいた（4月10日）。このようにマスコミからの関心もあり、マスコミ関係者からは取材先を探すのに活用できるとの声をいただいている。 　ガイドブックの送付を希望する申込みも4月9日時点で県内外から98件あり、関心の高さを伺わせる。 　また、団体内では地域活動団体の情報を集めてまとめるノウハウを蓄積することができた。
29年度以降の活動計画	29年度 　「地域活動団体ガイドブック2018」の作成。情報掲載団体を対象とした地域ミーティングの開催。企業や大学との連携事例の取材（以降、特集記事のテーマを変えて毎年ガイドブックを作成）。 　地域づくり・地域福祉の担い手である復興支援員・被災者支援員を対象とした調査の実施。 30-31年度 　参加型調査の手法を用いた地域づくり人材育成のプログラムを実施。

評価 （上段の該当する評価にチェックを付け，下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して， ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　被災地における地域活動団体情報を一覧できる冊子により、復興支援・被災者支援に向けた連携に貢献すると評価する。また、小規模多機能自治の学習会により、被災者を含めた地域全体で地域の課題解決力を高める一歩となった。

（別紙様式）成果報告書

整理番号	（２）－１
事業名	ＮＰＯ等の絆力を活かした復興支援事業業務
事業実施主体	□県直営事業　■委託事業（受託者：一般社団法人みやぎ連携復興センター）
支援対象者の概要	宮城県内で震災復興に取り組むＮＰＯ等の支援団体
実施期間	平成 28 年 9 月 6 日～平成 29 年 3 月 31 日
	・復興・被災者支援を行う特定非営利活動法人，公益社団法人，一般社団法人等（以下「ＮＰＯ法人等」という）が支援者や他の復興・被災者支援を行うＮＰＯ法人等と交流・情報交換により顔の見える関係を築くことで、被災地の復興及び被災者の支援に係る活動を継続していくために必要な絆力強化を図ることを目的とする。 ・交流対象者の現状に即して、以下、３つの交流の場を設けた。 ①　「東日本大震災から６年。地域の復興に向けた企業とＮＰＯのこれまでとこれからダイアローグ・セッション」 ・内容：開催地域におけるこれまでの企業とＮＰＯによる復興支援・地域づくりモデル・ノウハウが共有され、ＮＰＯと企業の相互理解がより深まり、協働が促進し得る環境が生み出されることを目標とし、ＮＰＯと企業の取組状況の共有、ＮＰＯと企業のダイアログ（円卓会議）、交流会を実施 ・スケジュール →気仙沼セッション：平成 29 年 2 月 17 日 女川セッション：平成 29 年 3 月 3 日 ②　「復興を支える担い手のためのリフレッシュ研修」 ・内容：復興に取り組む多様な担い手間の新たな関係性を築くために、日々の業務を離れた自然の中での交流や学びを得る機会を通し、お互いの事業・団体の方針や人となりを理解し合うことで、協働を促進するきっかけづくりを行った（県南での協働事例について話題提供、参加者で取り組みの共有、意見交換・ワークショップ、体験プログラム等）。 ・スケジュール →平成 29 年 3 月 17 日～平成 29 年 3 月 18 日 実施

<table>
<tr><td>事業内容とスケジュール</td><td>③ 「復興に向けた絆力フォーラム in 宮城」
・内容：多くの方に身近で取組まれているＮＰＯ等の活動を知って頂くため、「宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業」の成果報告会・情報交換会を開催した。また、同時に、ＮＰＯ等による絆力強化を図るため、円卓会議「復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力の強化に向けて」を開催した。
・スケジュール
→平成 29 年 3 月 24 日 実施</td></tr>
<tr><td>事業費とその内訳</td><td>■事業費総額(税込)： 3,814,311 円（国費 2,542,874　県費 1,271,437）
■内訳
委託費　3,814,311 円</td></tr>
<tr><td rowspan="2">具体の成果</td><td>①「東日本大震災から６年。地域の復興に向けた企業とＮＰＯのこれまでとこれからダイアローグ・セッション」
気仙沼セッション参加人数：18 名（企業 7 名、NPO 8 名、行政 3 名）
女川セッション参加人数：22 名（企業 5 名、NPO 11 名、行政 5 名、学生 1 名）
成果：ＮＰＯ同士・企業担当者同士の相互理解が深まり、活動情報やヒントを得るという目的に対して、今回のプログラムでは、相互理解を深め、今後の企業と NPO の協働推進意欲を喚起するものとなったとともに、ＮＰＯと企業の協働に向けたポイントは、「出会いの段階」と「事業設計の段階」にあることを整理出来た。
② 「復興を支える担い手のためのリフレッシュ研修」
参加人数：21 名
成果：目的としていた「協働を促進するきっかけづくり（つながりづくり）」と「リフレッシュ」に対しては、事後の参加者アンケートから一定の評価を得られた。一方で、具体的な協働を生み出していくためには段階的な機会作りや支援が必要なことなどが明らかになった。</td></tr>
<tr><td>③ 「復興に向けた絆力フォーラム in 宮城」
参加人数：来場者延べ 253 名（うち受付数 69 名）
成果：宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業の成果が広く共有され、成果に基づいた情報交換が行われるという目的に対して、事後アンケートではほとんどの方が「理解が深まった」と回答している。また、今後の復興に向けた絆力の在り方・強化についての意識・ノウハウが広く共有されるという目的に対して、事後アンケートでほとんどの方が「協働による取組を推進していきたい」と回答しており、目的に対した一定の成果が得られた。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">評価

（上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）</td><td>ＮＰＯ法人等の絆力強化に関して、
☐Ａ：特に優れた成果が得られた
☐Ｂ：優れた成果が得られた
☑Ｃ：一定の成果が得られた
☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた
☐Ｅ：成果が得られなかった</td></tr>
<tr><td>（上記評価の理由）
「東日本大震災から６年。地域の復興に向けた企業とＮＰＯのこれまでとこれからダイアローグ・セッション」、「復興を支える担い手のためのリフレッシュ研修」はそれぞれ、①企業とＮＰＯの絆力を発表とワークショップを通じて学ぶ・考える場、②復興の担い手同士の絆力を、普段とは異なる環境で心身を解きほぐしながら学ぶ場と、異なる手法による開催であった。双方からは、絆力を強化するため、担い手の立ち位置から、必要に応じた段階的な場・支援が求められていることが判明した。
参加者アンケートからも満足度は高く今後もこのような場が求められていることから、一定の成果があったものと評価する。</td></tr>
</table>

整理番号	（２）－２
事業名	東日本大震災におけるＮＰＯ等の活動実態調査事業業務
事業実施主体	□県直営事業　■委託事業（受託者：公益財団法人 地域創造基金さなぶり）
支援対象者の概要	宮城県内で震災復興に取り組むＮＰＯ等の支援団体
実施期間	平成 28 年 9 月 6 日～平成 29 年 3 月 27 日
事業内容とスケジュール	・事業内容 　宮城県内で東日本大震災からの復興支援や被災者支援を実施したＮＰＯ等の調査により、現在も活動している団体等の実態把握を行い、その結果を基に、協働やマッチングなど、復興支援及び被災者支援等に取り組むＮＰＯ法人等との絆力の強化を図るため、本事業を実施した。 調査の方法：アンケート調査と訪問調査 a)アンケート調査 　① 調査地域：宮城県全域 　② 調査対象組織：宮城県内を本拠地・活動地にしている非営利組織 　　963 件 　1.　団体種別 　1)　任意団体、特定非営利活動法人、一般・公益社団法人、一般・公益財団法人 　2.　団体情報源 　1)　特定非営利活動法人の登記情報 　2)　復興庁が実施する各種補助金等の受領組織 　3)　宮城県が実施する各種補助金・助成金提供事業の受領組織 　4)　受託者が有する組織情報 　③　調査方法：対象団体へ調査の協力を依頼し、インターネット上の所定サイト上での回答か、調査票への記入と返送を通じて回答を得た。 　④　調査時期：2016 年 4 月 1 日時点の状況について回答を頂いた 　⑤　回答数：240 組織 　⑥　回答率：24.9% 　b)　訪問調査 　①　調査地域：宮城県全域

	②　調査対象組織：活動地域、活動テーマ、組織規模等を考慮のうえ抽出した30組織 ③　調査方法：原則として団体の事務所等へ訪問のうえ、主に以下の3点についてヒアリングを行った。 1.　復興支援にかかる活動の状況について 2.　地域において対処が必要な課題等 3.　宮城県への期待事項 ④　調査期間：2016年12月～2017年3月21日 ⑤　回答数：30組織 ・スケジュール 平成28年9月～10月　調査票の作成 平成28年10月　調査対象団体への発送 平成28年11月～12月　回答済み調査票の受領、とりまとめ、分析 平成29年1月　訪問調査先団体の選定 平成29年1月～3月　訪問調査の実施、訪問調査結果のとりまとめ
事業費とその内訳	事業費の総額：2,370,600円（国費1,580,400　県費790,200） 内訳： 委託費：2,370,600円
具体の成果	調査票の送付：963件／ヒアリングの実施：30組織 調査結果から、地域で復興支援に関わる団体の実態を浮かび上がらせることができ、団体の状況に即した支援施策の基礎となる状況を把握できた。調査結果により、事業規模に応じた支援施策が必要であること、担い手の成長意向に即した異なる支援施策が必要であること、復興は多機関連携が必要であり、推進するための理解と下支えする資源が必要であること等の、復興支援及び被災者支援等に取り組むＮＰＯ法人等との絆力の強化を図るための基礎となる情報を得た。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	ＮＰＯ法人等の絆力強化に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった

	（上記評価の理由） 　組織の設立時期、復興支援事業の経験の有無、財政規模の違いによる意向の違い、現状認識、並びに各種分析や施策検討の基礎資料となる情報を調査、取りまとめすることができ、絆力強化のための協働やマッチング等の取組に繋がるものとなったと評価する。

３．審査委員会の開催結果

（１）審査委員会の名称

宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業審査委員会

（２）審査委員会の役割等

① 役割

・各支援事業に係る支援の対象となる取組の選定

・各支援事業に係る進捗状況の把握及び評価

② 位置づけ

・担当部の私的会議（任命者：宮城県環境生活部長）

（３）審査委員会委員の構成

石井山　竜平　東北大学大学院教育学研究科准教授（学識経験者）

高力　美由紀　宮城大学事業構想学部事業構想学科准教授（学識経験者）

加藤　房子　宮城県生活協同組合連合会常務理事（ＮＰＯ等）

大和田　学　（社福）宮城県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉課みやぎボランティア総合センター所長（ＮＰＯ等）

志間　俊雄　仙台商工会議所理事兼事務局次長（企業・経済団体）

鎌田　彰　日本政策金融公庫仙台支店東北広域営業推進室長（金融機関等）

橋本　潤子　橋本潤子会計士事務所　代表（会計専門家）

（４）今年度の開催結果

第１回

〇開催日：平成２８年５月３０日

〇議題：宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業（補助事業）の審査

〇概要：応募のあった事業のうち，１次審査を通過した事業について，応募団体からのプレゼン形式で審査を行い，支援対象事業を選定したもの。

第２回

〇開催日：平成２９年３月２４日

〇議題：補助事業実施団体からの実績報告及び委員による講評

〇概要：平成２８年度の補助対象事業について，団体からの実績報告を受け，審査委員により講評を行ったもの。

４．全体評価

東日本大震災に伴う避難生活の長期化や，災害公営住宅等への移転など，被災者を取り巻く生活環境が変化する中で，震災直後から県内外の多くのＮＰＯ等がその機動性や専門性等を活かした被災者支援などの活動を自発的に展開し，被災者の生活再建の支援，心身のケア，生きがいづくり，コミュニティ形成の促進等の各地域の復興進展に重要な役割を果たしているが，被災地のＮＰＯ活動を巡る状況は，寄附や助成金の減少，ボランティアの減少，県外から支援に入ったＮＰＯ等の撤退といった環境変化により，厳しくなっている。

こうした状況の中，行政では手の行き届きにくいきめ細かな復興・被災者支援の継続的な実施を図るため，特定非営利活動法人等被災者支援交付金を活用させていただき，宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業を実施した。

本事業では，移動支援や傾聴活動，学習支援，コミュニティ形成支援等の１４の取組に対し補助金を交付すると共に，絆力を強化するための３事業を委託により実施した。

補助事業においては，各補助事業実施団体が，被災者を取り巻く環境の変化に伴うニーズの変化に苦心しながらも，それぞれの活動地域や被災者のニーズにあったきめ細かな取組を展開した。この成果は受益者アンケートに現れており，ＮＰＯ等の取組から受益者が受けた効果の度合いについて，約８割が「改善した」又は「どちらかといえば改善した」と回答し，今後も継続して NPO 等の支援を受けたいという問いに対しても，約８割が「そう思う」と回答している。このことから，ＮＰＯ等による取組が受益者にとって効果的であり，期待も大きいことが明らかとなったことから，本事業の成果であったと評価する。

ＮＰＯ等の絆力を強化するための事業「ＮＰＯ等の絆力を活かした復興支援事業業務」では，企業とＮＰＯ等の協働推進意欲を喚起し，ＮＰＯと企業の協働に向けたポイントを、「出会いの段階」と「事業設計の段階」に整理する等，今後の絆力強化の取組に資するものとなったと考える。また，震災から 6 年が経過し，NPO 等の多様な担い手が余裕がなく疲弊し，かつ担い手間の関係性が固定化され，新たな協働を生み出し難くなっている状況に対し実施したリフレッシュ研修では，参加者アンケートから一定の評価得ると共に，具体的な協働を生み出していくためには段階的な機会作りや支援が必要なことなどが明らかになる等の成果があったものと評価する。

「東日本大震災におけるＮＰＯ等の活動実態調査」では，宮城県内で復興支援や被災者支援を実施している多くのＮＰＯ等が，複数組織の複合的な連携，或いは多機関の連携を指向することが明らかになる等，今後の絆力強化の取組の基礎となる調査結果を得た。このことにより，次年度以降の絆力強化の取組の発展に繋がる意義深いものであったと評価する。

平成２８年度の宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業では，当初の目標を達成し，ＮＰＯ等のよるきめ細かな復興・被災者支援の継続的な実施を図ることができたと評価する。一方で，今後も継続して NPO 等の支援を受けたいという被災者のニーズや，絆力強化のためのポイントや課題が明らかとなったことから，次年度においても，今年度の結果を活かし，きめ細かな復興・被災者支援の継続を図っていくものとする。